応用心理学のクロスロード

Vol. 01

2010. June

◉創刊号特別企画

対談 日本応用心理学会への期待を語る

JAAP 日本応用心理学会

未来志向の応用心理学

日本応用心理学会理事長　森下高治（帝塚山大学）

21世紀も10年を経過、その間、人が住む社会は前世紀の課題を引き継ぎ、社会経済環境や地球環境問題を考えるとより悪化の途にある。

私たち応用心理学に研究軸をおくものとして基礎でない応用心理学領域は、まさに社会と直結している。研究をとおし提言も含め社会にフィードバックする意義は極めて大きい。私の大学院時代を振り返ると、研究は研究のための研究であってはならない、必ず社会に寄与・貢献しないと意味がないとよくいわれた。まだ駆け出しの頃、広島で開催された大会で（財）労働科学研究所の西岡昭先生から「あなたの発表論文は、何のため、誰のための研究か？」との質問を受けたことを鮮明に覚えている。

1970年代に繊維産業の若年労働者の適応問題に取り組むためよく中京地区に行き、調査にもとづく労働実態と彼女たちの職業意識の問題を扱ってきた。また、繊維産業が労働集約産業であった全盛期になぜ彼女たちは働きに出るのか、彼女たちの親元の高知県のある漁村に面接調査に入ったことがある。人の流動の問題は、社会学、経済学的な見方から考え捉えていく必要性を感じたが、自らの研究をとおして、それが若年労働者のためになったかは、極めて浅い認識であったように感じた。

これ以降、私の研究姿勢は、応用心理学が現場あっての学問で、机上の学問ではなく、産業現場に出向いたときは必ず現場をみせて戴くことから始まるものとなった。

実際、応用心理学を学ぶものは、人間行動に対してさまざまなアプローチで取り組むが、私のスタンスをここで紹介してみたい。

もともとフィールドサーベイを中心に国内外の働く人たちの職業意識、ライフ・スタイルの問題に取り組んできた。一方では個人を中心とする産業心理臨床の問題も扱ってきた。特に個人の自己実現と安寧に対して、フィールドをとおした労働の実態から職業行動の問題を明らかにする、他方、一個人に焦点をあて、まさにその人がなにを考え、どんな気持ちで生きておられるのか、そして必要であればサポートする。両者は相補的な関係にあり、そこに応用心理学の存在価値があるかと思う。しかも、冒頭で述べた昨今の社会経済的環境、地球環境の問題は、個人を超えるところにあり、そこには学際的な問題、他領域研究者との連携の問題がある。

この『応用心理学のクロスロード』創刊にあたり、細分化された心理学のさまざまな領域の統合・融合が必要と考えている。最近、心理学の近接領域である脳神経科学の分野ではいろいろなことがわかってきた。また、応用心理学は認知科学の問題ともかかわりが深い。そして、領域の位置としては相当遠い位置にある領域からの参入もある。私たちは、なによりも先達が築いてこられた応用心理学を学び、これからの応用心理学を考え、他分野、他領域の研究者との共同作業を通じ、社会に貢献できる学問にさらに育てていきたいと考える次第である。

CONTENTS

刊行にあたって　未来志向の応用心理学　森下高治 …… 1

◆日本応用心理学会 第77回大会へのお誘い　3

創刊号特別企画　対談 日本応用心理学会への期待を語る …… 4

森下高治［日本応用心理学会理事長・帝塚山大学／同大学院産業心理臨床領域教授］×山本 博［アテネ五輪アーチェリー銀メダリスト・日本体育大学体育学部准教授］

応用心理学 未来への展望

将来に向けての心理学の役割は大きい　髙嶋正士 …… 10

自由に学べるという喜びは、何にも代えられない　宮本美沙子 …… 11

ホープ登場　クロスロードの星

①棚橋彩香［京都大学］12　②小野洋平［駒澤大学］14　③中井　宏［神戸大学・大阪大学］16

④引地博之［東北大学］18　⑤長内優樹［大正大学］20

大学探訪　研究室におじゃましました　中京大学心理学部　尾入正哲 …… 22

職場探訪　財団法人 労働科学研究所　越河六郎 …… 25

CROSSROAD ESSAY 私と応用心理学 ①

応用心理学が果たす役割の大きさに新鮮な驚きを感じる　藤田主一 …… 28

海外最新事情　東アジアの発達障害研究の現状と課題　荒木穂積 …… 30

心理学から見たおすすめDVD紹介　『こんばんは』　田中真介 …… 33

BOOK REVIEW 本を出しました …… 34

林 潔〈他薦〉『こころの健康の基礎理解』／田中堅一郎『荒廃する職場／反逆する従業員』／齊藤 勇『図解雑学 見た目でわかる外見心理学』／大坊郁夫『関係とコミュニケーション』／網野武博『子ども家庭福祉の新展開』／蓮花一己『こころのケアとサポートの教育』／小林幹児『介護職・リハビリ職（PT・OT・ST）のためのシンプル回想療法』／橋本秀美『スクールカウンセリングに活かす描画法』

応用心理士の現場

わが国における障害者武道の普及とその対策について　中島　豢 …… 38

さまざまな心理対応方法を研究・実践　柳澤淳子 …… 40

◆日本応用心理学会認定「応用心理士」資格認定申請のご案内　41

常任理事会通信

◆2011年第78回大会開催校・研究室紹介　42　◆第27回国際応用心理学会大会のお知らせ　43

◆機関誌編集委員会からのお知らせ　44　◆事務局だより／日本応用心理学会入会案内（申込書）　46

◆原稿募集　47

日本応用心理学会第77回大会へのお誘い

日本応用心理学会第77回大会事務局長　長崎純子［河合義根・可根記念福祉会 和（なかよし）］

国際連合は、2001年から2010年までを、「世界の子どもたちのために平和文化を提供し、非暴力を実現していくための10年国際行動期間」と提起しました。そこでは、未来を拓くすべての子どもたちの発達を深く理解し、多面的な人間研究の最新の成果に基づいた適切な医療・保育・教育・子育て支援の取り組みを行うことを世界に呼びかけています。その締めくくりの年にあたる2010年の秋、9月11日（土）～12日（日）に、京都大学で日本応用心理学会の第77回大会を開催させていただくことになりました。

日本応用心理学会が設立されてから現在に至るまで、心理学は多岐にわたる領域で常に研究と実践が相互につながり合いながら発展してきました。そしてその根底には、人間の生活・安全・健康・発達を保障し、人間らしく生きていくことを保障するために何が大切なのかを問う学問としての姿勢があったかと思います。そのため今大会では「実践のなかで人間を徹底して尊重する心理学をめざして」を共通テーマとして、日本応用心理学会の特色を活かし、それぞれの分野でご活躍の会員の皆様のご協力を得て、人々が互いに信頼し尊重し期待し合う力量を高め、自らの力を社会のなかで十分に発揮して自己の価値を確証し、互いに互いを支え合いながら安心して暮らしていけるような平和な社会を作っていくには何が必要か、そのことを多面的に深く考究したいと思います。

今大会では、これまでにない新たな取り組みに挑戦します。プログラムに先行して、いくつかの企画をご紹介いたします。まず大会の柱となる研究発表やシンポジウム等についてですが、発表申し込みの時にアブストラクトを出していただき、大会HPで公表いたします。シンポジウム・ワークショップ・研究発表等の概要に触れやすくすることで、学会員以外の方にも広く日本応用心理学会第77回大会に関心をもっていただけると思います。研究発表は、ポスター発表のみですが、発表者と参加者の議論や同じ研究領域内での成果がより多くの人たちとの間で共有できるように、在席責任時間内にショートレクチャーの機会を設けます。それにより、参加者が同一領域内の発表者全員の報告を聞いた上で個々の発表内容についてより深く議論できるようにします。また、抜刷り設置コーナーなども設け、若手研究者にも多様な形で研究の成果を報告する機会を広げます。

大会企画資料展・シンポジウムとして、日本の発達保障の礎を築いた糸賀一雄を取り上げます。何のために実践をするのか、何のために研究をするのか、「徹底して人間を尊重する」ことについて参加者一人ひとりが今大会を通じて原点を探り、自らの今後につなげていく機会としていただきたいと考えております。貴重な資料を多数展示しますので、ぜひ足をお運びください。

また、大会企画シンポジウムでは、国連による平和文化の提供および非暴力の実現の提起をふまえ、人間の生命の根幹を揺るがした問題を取り上げ、「9.11の子どもたちへ」を予定しております。折しも、大会開催が9月11日であることに不思議な巡り合わせを感じ、同時にこれからの平和構築に向けた応用心理学の発展を強く願います。

ワークショップでは、臨床現場における心理学の役割を考えるうえで、精神医学の視点、発達診断、医療被害について取り上げます。また、体験型ワークショップとして、音楽づくりやプレイバック・シアター、さらにシンポジウムや資料展に連動した映画上映も行います。他にも、同一のテーマに沿って同異分野で実践されている方が交流できるミニ交流会、懇親会など多彩な企画を準備し、発展的な大会にしたいと思います。

京都では、第65回大会を龍谷大学で開催しました。そのなかでは、人類史・平和・医療・保育・福祉などを柱にシンポジウムやワークショップが企画され議論が繰り広げられました。あれから12年。現在、京都市では民間保育園におけるプール制の廃止など、子どもたちの育ちを取り巻く環境が大きく変わろうとしています。同じ京都という地で、また、第65回大会で準備に携わっていた者が再び今大会の準備に関わることになり、改めて12年間の研究・実践を振り返りこれからの社会における応用心理学の役割と課題について考えたいと思います。

これから大会当日までの間、2号通信・大会HP・プログラムなどで「日本応用心理学会第77回大会in京都」の詳細や魅力を順次お伝えします。研究や実践の成果を存分に交流していただけるよう、これから準備を進めてまいります。皆様のお越しを心よりお待ち申し上げております。

創刊号特別企画

日本応用心理学会理事長
帝塚山大学/同大学院産業心理臨床領域教授
森下高治

日本応用心理学会への期待を語る

35年という長い間、高いレベルでモチベーションを持続し現在もアーチェリー競技の一線で活躍する山本博氏と、74年以上の長い歴史をもつ日本応用心理学会の理事長に昨年就任した森下高治氏が、持続する志の秘訣、現在の日本への危機感、そして日本応用心理学会への期待を語る。

昨日と違う今日を過ごす

山本◎先生、本日はよろしくお願いします。

森下◎こちらこそ。今日はまず先生がずっと、長年アーチェリーの世界でやってこられて、先生を支えているものっていうのは一体なにかということを教えていただきたいんです。

山本◎はい。今年でプレー35年目になるんですね。初めて出会ったのが中学1年生で。最初の10年というのはもう本当に、毎日、自分のなかで新たな自分の能力と出会うことができてですね。良いも悪いも。下手になっても、下手になるということを学ぶことができて。階段というのはずっと登って行くもんじゃなくて、下ることもあるんだということも知ることができたし。とにかく、ありとあらゆるものが、たとえば初めてインターハイに出れば、人からは聞いてはいるものの、自分自身が、それが初めての体験で。翌年インターハイに出たら、じゃあ2回目だから初めてじゃないのかというと、2回目のインターハイがまた、初めてなんですよね。

森下◎ああ、そうですね。

山本◎そういうふうなものの見方でいくとですね、10年間というのは、毎日、本当に新鮮な日々だったものですから、あっという間でしたね。それで、次の10年というのは、今度は銅メダル（1984年、ロサンゼルス五輪）をとってからになるんですけど、メダルという物質的な物への欲求が非常に高まりまして。銅メダルをとってこれだけの社会の評価。金メダルを取った人に対しては、あれだけの評価が社会から下されると。もうとにかく金メダルをとって自分を中心とするアーチェリー界を変えていきたいということで突進した10年でしたね。そして20年を過ぎて、今度、30年目に向けてというのは、まだまだ物質的な部分がずっと引きずるなかで、高校生に対しての指導の理想を追っていくというんですか。

森下◎ああ、先生は高校の先生もされていたんですね。

山本◎はい。正直いいまして物質的なことだけに注目したなかでの、金メダルを取るための手法、技術開発というか、そういったことだけに自分の思考が集中していて。にもかかわらず、子どもたちのことに関しては、自分の高校生時代を思い出

対談

アテネ五輪アーチェリー銀メダリスト
日本体育大学体育学部准教授

山本 博

して、そのときの理想の指導者を追っていく自分が、もう1人存在してたんです。

森下◎なるほど。

山本◎それでシドニー五輪（2000年）がありまして、落選したんですけども。その落選したことによって、最大の挫折を感じたことにより物質的な欲求というのが、いかに無意味で、はかないもので、自分も、家族やまわりを含めてものすごく不幸にしてしまったんじゃないかという、過去の10年間を振り返って反省がありました。そしてその後は物質的な欲求というものを捨て去ったうえで、アーチェリーとまた新たに向き合って、ここ5、6年というところですね。ですから35年間というのは、たしかに長いという方が多いんですけども、自分のなかでは単発に、まず大きく10年ぐらいずつ3ブロックに分かれてて。なおかつ毎日のなかで、自分自身が非常に飽き症なもんですから、飽きないようにするために、どんどん工夫を重ねて、昨日と違う今日を過ごすようにして、まあ今日があるんじゃないかと思うんですよね。

森下◎今、先生のお話のなかで、すごく前向きにみてらっしゃるというか。これはわれわれの世界のなかで認知という言葉を使いましてね。ものごとをどう捉えるか、あるいは人をどうみるかというか。これは非常に大事なことなんです。前向きに考えることによって、未来志向というかね。われわれ心理学の世界も、社会に、いかに貢献するかということを常に私は考えているんです。若い人の研究でも、研究のための研究はだめで。やはり社会に寄与するような研究をせんといかんと。先生はアーチェリーの世界で教育もふくめて、前向きにやってらっしゃるので、これは大いに見習わんといかんな、学ばせていただかんといかんなと感じました。今を大事にする。そしてその次にまた向かっていく。これはやはり競技の世界も、あるいはわれわれの学問の世界も、同じかなと思いながら聞かせていただいてるんですけど。

山本◎ありがとうございます。私の場合は、飽きっぽいもんですからね。とにかく自分の昨日までの成績にも飽きてるわけで。だからもっとうまくできる自分になりたい。これはアーチェリーに限らず、ほとんどのことで、そういうふうな習慣があるんです。ただ、なんでか勉強だけには、その発想が向かなかったのが、今でも非常に残念ですけどね（笑）。

森下◎そうですか（笑）。

山本◎それ以外のことに関しては、自分のなかでなにか工夫というものをしてしまいがちなんです。たとえば、ランニングをするんでも、昨日までがこういうふうなランニングだったら、今日は、1歩でも2歩でも長い距離にしてみようとか。そういうふうなことをしないと、つまらないんですね。

森下◎うん。それはやっぱりすごく、興味深いお話ですね。私自身が適性問題を手掛けていて。

いろいろ考え方があって、能力の他に性格とか興味とかね、態度とかあるんです。そのなかで、興味っていうのは動機づけに1番大事な要素なんです。興味がなかったら、長続きしないんです。能力、これも大事なんですけど。私が大学院の修士のときにアメリカからスーパー（Super, D.E.）という有名な先生が来ましてね。その方が能力とか興味とか態度とかいう、適合にかかわる1つのモデルを出したんですね。そのなかで、能力には、知的能力とか言語能力はあるんですけど、それ以外にまだわからないものがあるという。

山本◎へえ。

森下◎そういうことを日本で話をされて。能力でまだわからないものがあるなんて、と興味をもちまして。それもまあ、私が大学院からドクターに行った理由なんです。だからすごく、人間の可能性みたいなものがあるけれど、それの1番の動機づけというのはやはり興味の問題ですよね。先生はずっとアーチェリーに興味をおもちだから、どんどん持続的になさってる。人それぞれ、生涯発達の視点からいうと、節目、節目があるんですね。その節目、節目を考えながら、その今のお話のなかで工夫をしているいう姿から、やっぱり工夫そのものが人間が求めるもんかなと思いながらお聞きしたんですけどね。

山本◎はい。たとえるなら、遠征に行ってですね。寒い所に住んでる人たちのほうが工夫や知恵を働かせてるなと思うんですよ。で、南のほうへ行くとですね、南方の人たちは気候に対してのんびりでいいなと、感じるんです。物質的な欲求は、先程もいいましたように、自分のなかで1つ解決した部分があるんですけども、それでもですね、まだ僕が、なんだかんだいっても金メダルを手にしてないんで。やはり表彰台の上にあがっている人の、その得たものはなにかを、自分自身もあそこに行って感じてみたいという欲求はあるんです。これが無くなったら、満腹になっちゃったら次の自分自身の工夫だとか知恵というのは、おそらくもう生まれてこなくてですね、今はまあ、そうですね、寒いなかで凍えながら、なんとか火を焚こうと思って工夫、努力をしていた高校生、大学生時代に比べれば、多少ちょっと穏やかになってきちゃってるのかもしれませんね。でも、まだ南方のほうまではいってないんで。今日も練習をしてからこちらに来たわけなんですけど。まだ知恵が浮かんでくるところがあるんですよね。この知恵が浮かばなくなったら、努力に対して自分自身が無理やりなんかしなきゃとか、今までの過去を守るためにやらなきゃいけないなんて発想が出てきたら、自分のなかの生き方としてはあまり合わない生き方なんで、おそらく違うところの、先程先生がおっしゃった興味というものが、もっと自分がわくようなものに、シフト変えするんじゃないかなと思うんですけどもね。

先生を支えているものは一体何でしょうか？◎森下

もりした・たかはる◉日本応用心理学会理事長、帝塚山大学／同大学院産業心理臨床領域教授。1944年大阪府出身。1973年関西学院大学大学院文学研究科教育心理学専攻博士課程修了。流通科学大学教授を経て、現職。2009年日本応用心理学会理事長に就任。研究課題は働く人たちのライフスタイル問題、メンタルヘルスにかかわるストレス問題。職業行動の問題を調査研究と実践（カウンセリング）の両面から取り組んでいる。

▌満たされた状態では、ストップしてしまう

森下◎面白いですよね。今、先生のお話のなかでね、人間には欠乏の欲求と成長の欲求がある。欠乏欲求は、底辺の、しかも物質的、身体的な低レベルの欲求ですが、それが満たされると人から認められたいとか、自分の可能性を試したいという成長欲求に移行するんです。先生の場合、銅メダルから銀には20年、次の銀メダルから金へと言うことは、成長欲求に向かうなかで、欠乏欲求をバネに知恵と工夫、さらに興味をすべて結集して目指されていると思うんです。そこに新しい理論が出てくるのではと思いながら聞いていたんです。満たされた状態というのは、やっぱり

そこで、人間はストップしてしまうのでね。

山本◎はい。僕はですね、30何年過ぎてですね、珍しいアスリートになったなと思います。アーチェリーといえども10年で辞めちゃうとか、5年で辞めちゃう選手もいっぱいいて。5年で辞めた選手のアーチェリー観は僕とはまったく違うでしょうし。たとえば野球なんかですと、今度、西武にまた戻ることになった工藤投手が同い歳ぐらいなんですよね。

森下◎ああ、そうですね。

山本◎彼と話してるとあれだけやってくると、僕の思うプロ野球選手のイメージとはだいぶ違った内容の会話ができるんですよね。だから選手っていうのも長年やると、どんどん1つの考え方に凝り固まっていくんじゃなくて、固まらずにどんどん考え方が変化していくんだなあという思いがあってですね。固まっちゃう人はそこで、終わりを告げていくのかなあなんていう思いがあるんですよ。僕らはそういうふうに変わっていってるんで、アスリートとして続いているのかなと。競技性は別としてもですね。で、世の中の概念で、野球は何歳で引退するもんだっていうことも、まったくその概念にはまらず。社会の人たちが皆びっくりするようなことをやっているわけなんですけど。

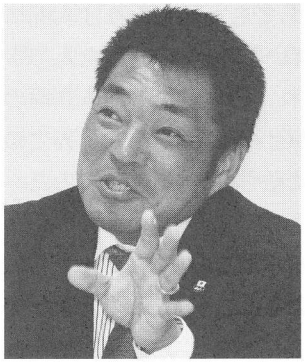
■ 世の中の流れにすごく危機感を感じている

山本◎僕は今年（2009年）、東京オリンピック招致にだいぶ関わったわけですよ。最初、僕は大反対だったんです。石原さん（都知事）が立候補するっていったときに大反対して、やめたほうがいいっていうような主張をしてたんです。なぜかというと、やはりまずは順番的なものを考えても非常に厳しい所があると。また、招致するのにもものすごくお金を使うと。

森下◎そうですね。

山本◎失敗に終わったときには東京都の都民の税金を、かなりな金額を使うわけですから。石原さんが立候補したにもかかわらず、失敗したならばスポーツ界にお金を使ったということで、われわれが悪くみられてしまう余波が届いてしまうんだったら、今回は立候補しないほうがいいっていうふうに僕はいってたんです。だけど結果として石原さんが押し切って、立ち上がってしまった。だとしたら、僕は一変してもう立っちゃった以上、招致が決定してプラスマイナスゼロにしないといかんと。あえていえば子どもたちの心に無形の物が少しでも与えられれば、と思って協力したわけなんです。そんななかで、いろいろな招致活動のなかでですね、何度か僕が行く所で、一般の都民の皆さんから、結構厳しい質問だとか投げかけられて。今いらない、箱物行政がいわれてるなかに、オリンピックの招致が決まったら、いらない箱物として競技場作るんじゃないかというふうなことをいってきた方がかなりいるんですね。そのときに僕は、子どもたちやアスリートの未来だとか、それをみて感動だとか、そういった形のない物の財産を生み出すフィールドをいらない箱物として、他の厚生労働省だとかが作ったビルディングと同じように捉える人たちが、こんなにも多くいるようになってしまっていることに対して、ものすごくさびしく感じてですね。ああ、日本人というのは、いらない箱物なんていうキャッチフレーズが生まれてしまうと、どんなことにも自分のイメージのなかで、これもそうだ、あれもそうだで、使ってしまうようになってしまっていることがすごくさびしく思えて。それで僕のなかではこの部分はかなり急いで、子どもたちの発想を変えていかないと。税金を無駄に使うとか

すごく飽き症なんで、飽きないように、どんどん工夫を重ねています◎山本



やまもと・ひろし◉アーチェリー選手、日本体育大学体育学部准教授。1962年神奈川県出身。1986年日本体育大学卒業。1984年ロサンゼルス五輪男子個人銅メダリスト、2004年アテネ五輪銀メダリスト。アーチェリー競技において、日本を代表する選手として長年にわたり活躍。アテネでは41歳にして銀メダルを獲得し注目を浴びた。現在はアーチェリーの現役日本代表選手、大学の准教授として多忙な日々を送る。

無駄に使わないとか、そういう仕分けを今、一生懸命やってるんですけど、僕なんかが関わってるスポーツや、芸術文化っていうのはそもそも無駄なわけですよ。だけども必要な無駄と必要じゃない無駄があって。これらは、僕は人間の営みを、人間をまともな感性を維持して生きていくために必要な無駄な部分だと思うんですよ。これまでも排除しようとしている世の中の流れに、僕はすごく危機感を感じてましてね。だからこれが心の部分で、そもそも行動や発想が生まれてるとするならば、その心の部分の修正だとか、それがどうしたらできるんだろうなと。力説しても、受け入れる、まず間口の、入口の心が開いていないじゃないですか。

森下◎やっぱりね、私はいつも、子どもたち、それから大学生とか大学院生、あるいは応用心理学の若い研究者は夢をもたないとと思うんですね。志を高くして。そしてそれが実現できる社会でないと。今、先生がおっしゃってるようにね。文化にしてもスポーツにしても、私もそれは人間にとってなくてはならないものという理解なんですよね。だからわれわれ、心理学に携わる立場の人間もどうしていくかというのは、今日、先生のお話を聞いて、さらに私ももう1回考えてみたいと思いますけど。

山本◎本当に、今の日本がこのままでいったら、すごく厳しい未来があるんじゃないかなと思ってですね。

森下◎スポーツ界もそうですが、大阪でね、国際児童文学館というのがあるんですが、財政難を理由にこの度、建物もろとも整理の対象になってね。国の内外からの貴重な文献が行き場を失う。これは子どもたちの文化を潰すことに繋がるんですよ。私はけしからんと思うんです。

今の場を大事にする。過去を振り返らない。◎森下

山本◎日本はすぐ費用対効果になってしまって、何人の人間が週何回楽しむんだとか、来るんだとか、そんなとこから始まっちゃうじゃないですか。

森下◎もっと行政のスリム化をして、そのうえで文化やスポーツ、そういう振興をやっていかないと。やっぱり子どもたちに夢を与えていくのが、われわれの責任ですからね。先生のおっしゃってるように、今やらんといかんことでしょうね。

▌日本応用心理学会への期待

山本◎子どもたちの話なんですが、長く生徒指導部に属するとですね、社会、学校のルールに従えないとか、そういうふうな子たちと向き合うんですが、自分の指導方法にものすごく悩むわけですよ。でも結局接していくと、その子たちにはものすごく悩みがあって。教師として向き合うえで本来は、すごく自分自身に学べる子たちなんですよね。でも辛いですよね。だから僕はもうそのときに思いましたけれども、先生とかそういったカウンセリングの仕事をされる方も、元気な人は来ないわけですから。

森下◎ほんとそうですよ。

山本◎そういう人たちの話を聞いたり、治療をする人たちっていうのは、本当に尊い仕事だなって、尊敬しますね。

森下◎先生からそういっていただいて。人間、先生や私、応用心理学会の若い人たちもそうですけど、自分の力で全部感じとって、そしてそれを、対社会に対して、対相手に対して向けて行く。そして人間やっぱり変化していかないといけない。人生、仮に100年であれば、常に、90のときであっても変化せんといかんと。そのなかで人、あるいは世の中に対して、幸せな社会、そういうも

のを先生の場合はアーチェリーを通じて、私たちは心理学の世界、応用心理学会としてそういうものを社会貢献したいというね。私は、応用心理学が、人間生活をより、いいものにするために、いろんな形で研究者は、それこそ実際の研究、科学的な研究も含めて、やっていかなあかんと思うんです。で、先生のアーチェリーの世界、スポーツの世界からも、心理学、応用心理学において、いろいろ学ばせていただきたい。そしてまた研究も含めて、いろいろやっていくことができればね、非常に学会にとってありがたいと思うんです。人間が生きていくなかでより豊かに、しかも健康で、そういう社会を実現していきたい。その辺でね、先生のほうから、この応用心理学会、あるいは応用心理学徒に対してのなにか期待などございますか。

山本◎心の部分が、やはり豊かになるということはものすごく、僕は大事なことだと思うんですよ。で、その心が豊かになるために、気がつける人もいれば、やはりヒントをもらわないと気がつけない人が世の中にいるので、そのヒントをですね、わかりやすく、学問という領域ではなくて、生活に非常に密接した部分で表現してもらえるとすごくありがたいなと。今のこの世の中で、僕自身、日本人のなんだろうな、すごく嫌な所だと思うのは、たとえば若者が、山本先生、僕とっても先生のことリスペクトしてますとかね。リスペクトと尊敬（そんけい）だったら、こっち5つで、こっち4つなんですよ。

森下◎（笑）

山本◎時間の短縮にもなってなければ、なぜこういう言葉をわざわざ使うのかなあというふうな日本の風潮があってですね。どこかで、日本人というのは格好をつけたがるとこがあって。僕はぜひ、心の部分で、もっとこう、肩の力が抜けた人生を送れるような、日本人のライフスタイルというものを構築する。そんな所をぜひ、わかりやすく表現してもらえれば嬉しいなと思います。子どもたちが精神的に、より豊かに人生を生きていくための、なにか指針をですね、ちびっこマニュアル、みたいなものを出してほしいなと。

社会に何かを還元していく考えは、自分自身をものすごく成長させる◎山本

森下◎そうですね。

山本◎道徳だとか宗教だとか、そういう言葉になったら、やはり多くの保護者が抵抗してしまうんで。これが心理学という言葉になると、比較的、今の保護者でも素直に受け入れられる人が増えて来ると思います。

森下◎ああ、そうですね。

山本◎子どもの教育のなかにおいてですね、心の教育の部分、これが将来の、10年後20年後の人の心の考え方に、どういう生き方が豊かな生き方なのかっていうところまで影響を与えてもらえるようななにか、指針を出してもらえると嬉しいなと思っています。

森下◎なかなか難しい課題ですけど、大事なことですね。私なんかもね、自分自身が人との出会い、ここは大事にして、子どもたちにもこれからの10年、20年、30年、40年の間である出会いを大切にしてほしい。私の出会いというのは実は、大学院の最初入ったときに出た1冊ですね。さっきいったコロンビア大学の教授であったスーパーという先生のお弟子さんが出した本なんですね。これでもう私は、この世界で食べて行きたいということになったんです。学生、院生なんかにもいってるんですけどね、人との出会い、ここを大事にしていく。それが、先生がおっしゃってる前向きな、あるいは未来志向や工夫をしてとか、そういったことに全部通じていくのかなと思いながらね。人間やっぱり五感がありますから、スポーツいうのはもうすべて、全人格的、全人間的、先生のもってらっしゃるものがすべてアーチェリーの、そこの所に、きちっと集約されるような感じを、私は受けてるんです。私はよくいうんですけど、やっぱり人間、せっかく生まれたからには自分らしく生きて、そして尚且つ社会にプラスにいうかね。勝手な見方で失礼いいましたけれど。本日は貴重なお話を本当にありがとうございました。

山本◎とんでもないです。とても興味深いお話でした。こちらこそありがとうございました。

（2009年12月7日／八重洲倶楽部にて）

応用心理学 未来への展望

本学会の名誉会員に応用心理学との出会い、応用心理学への期待などについて語っていただきました。

将来に向けての心理学の役割は大きい

高嶋正士

たかしま・まさし
1951年、日本大学を卒業。現在は共立女子大学名誉教授（文学博士）、学校法人共立女子学園評議員（現在）、長岡西病院心療内科兼ビハーラ病棟（非常勤）、長岡看護福祉専門学校（非常勤講師）、浄土真宗本願寺派真照寺住職、日本応用心理学会名誉会員、日本理論心理学会名誉会員・顧問、日本心理学会終身会員。
主な著書は、『臨床心理学』（医学出版社）、『発達と教育の心理学』（編著福村出版）。

日本応用心理学会の思い出

私と日本応用心理学会とのご縁は、1951年で、心理学の会員としての最初であり、次に1953年に日本心理学会の会員となる。

当時、応用心理学会に包含されていた諸領域は現在では皆独立した学会になっている。

1955年頃までは、応用心理学会年次大会は年2回、春と秋頃に開催されていた。当時は大会初日の正午に記念撮影が行われ、そのアルバムをみながら当時を懐かしく思う昨今である。私が最初に研究発表させてもらったのが1953年の第15回大会で埼玉大学が会場であった。

特に、私が印象に強く残っているのは、第62回大会で私が専任校であった共立女子大学で行われた。それが1995年9月であった。当時の総会で、はじめて日本応用心理学会が認定する『応用心理士』が誕生し、最初の認定授与式が行われ、大会会長として第1号をお渡ししたことで誠に光栄に思っている次第である。私の日本応用心理学会の過去の記憶として永久に残る。

日本応用心理学会の将来に向けて

今、「心が危ない」時代といってもよい。物が豊かになり機械化され便利になったが、その裏側で人間は苦しんでいる。少子化や高齢化が進み、話し相手もなく一人ひとりが孤独に陥ってしまい、自分の意識のはけ口が閉ざされ、ストレスが強くなり、心が荒廃する。その結果、現代病・ストレス病といわれる「心の病」が増加するばかりである。人間疎外という言葉もこんなところから出たのではないか。

心が異常に乾燥した社会に誰が潤いをもたらし、人間回復をはかってくれるのか、宗教家か、政治家か、教育者か。それは誰であってもよい。これからの「応用心理士」は「臨床心理士」と同様に、臨床現場のみならず、人間関係を豊かにするための技法の習得が重要となる。

最近、応用心理学会での発表部門をみると、医療・福祉・看護に関する発表が増えてきた。誠に喜ばしいことである。

悩み苦しんでいる人の身（立場）になって考え、人の悩みを我が悩みとし、耳できくだけでなく心で聴く、そして、ともに生き、ともに苦しむというそんな心のもち主となることが大切である。自分の語ることを真剣に聴いてくれる人が少なくなり、笑顔も見られなくなった。

過去10年間の統計によると、毎年自殺者が3万人を超えている結果が出ている。

自殺者が急増する理由はなにか。死は人間誰しも避けられない宿命ではあるが、だからといって死を急ぐことは正しくない。無謀をせず細心の注意をもって生き、そして死ぬ者は人間の宿命に正しくしたがった者である。

私たちは、どのような障壁に遭遇するも、それに耐える力を養い、自ら解決する方向に発展できるよう努力することが大切である。

将来に向けての心理学の役割は大きい。

自由に学べるという喜びは、何にも代えられない

宮本美沙子

「応用心理学のクロスロード」の創刊、誠におめでとうございます。

「応用心理学」は、その名の示すように、心理学のなかでも応用のきく、自由に研究できる可能性に富んだ学問だと考えられます。このような自由な会の存在は誰にとっても有難いことですが、特に若い方たちには貴重なことです。

「日本応用心理学会」で、若い心理学者たちがどんどん発表なさることを、大いに期待しております。

日本応用心理学会との出会い

私の日本応用心理学会への参加は、故児玉省（はぶく）先生のおすすめにより、戦後間もない頃に入会いたしました。したがって、学会に所属してすでに60年以上になります。その間にいろいろと学ばせて頂きましたことを、感謝しております。

当時はいわゆる戦後間もない頃で、今とは比べ物にならないほど物質的には不自由な毎日でした。けれども、自由に学べるという喜びは、何にも代えられないほど大きな喜びでした。教室の暖房も十分でなかったために、教室でオーバーを着たまま授業を受けたこともありました。今の若い方たちには想像もできないことでしょう。しかし、学べることの喜びにより、いそいそと学校に通ったことを懐かしく思い出します。

児玉省先生はアメリカで学ばれたために、当時としては学生からの意見にも耳を傾けられるなど、アメリカナイズされたお考えの授業でした。そのために、その後アメリカに留学した私にとっては、そのオリエンテーションは有難かったと申せました。

アメリカ留学での経験

アメリカでは、はじめの1年間はミシガン州にあるメリルパーマー研究所のC.E. Moustakas（ムスターカス）教授の研究室で学び、その後マサチューセッツ州にあるブランダイス大学の大学院で、A.H. Maslow（マズロー）教授の指導を受けました。Moustakas教授もMaslow教授も、スケールの大きい寛大な方で、私の語学のハンディキャップをよく許容し、何をいいたいかを理解していい直して下さるなど、大変有難いことでした。

メリルパーマー研究所の1年間は寮生活をし、後の2年間の大学院の学生のときには、普通の家庭のお世話になりながら、そのご両親が夫妻でお出掛けになるときには、小学生のお子さんのお相手をする名目でいわゆるベビーシッターの役目もさせていただきました。

3年間のアメリカ留学後、日本に戻り、日本女子大学に勤務いたしました。日本女子大学では、学部長や学長なども務めさせていただき、多忙に過ごしました。アメリカの留学をはじめ学生時代に、いろいろな経験をさせていただいたことは、得難い経験であり、多くの方々のご指導を得られたことなど、深く感謝しております。

みやもと・みさこ
1954年日本女子大学児童学科を卒業。1957年アメリカに留学し、児童の臨床心理学者C.E. Moustakas教授、心理学者A. H. Maslow教授ほかの指導で学んだ。3年後に帰国、日本女子大学にて児玉省主任教授のもとで助手・専任講師・助教授・教授を務め、1980年に東京大学で教育学博士の学位を取得。日本教育心理学会その他の学会の名誉会員。

ホープ登場 クロスロードの星①

日本応用心理学会の未来を担う期待の若手ホープを紹介します。

京都大学大学院教育学研究科（専修コース）
教育科学専攻

棚橋彩香

あいさつ

はじめまして。田中真介先生のお誘いにより、今年の日本応用心理学会の実行委員会でお手伝いさせていただくこととなった、棚橋彩香です。実行委員会では、会計を担当させていただきます。これまで日本応用心理学会との接点もほとんどなく、学会の実行委員会に参加した経験もないのですが、できる限りのことをしたいと思います。よろしくお願いします。

ゼミについて

現在、京都大学大学院教育学研究科（専修コース）に所属の修士２年生です。専修コースとは、研究者を養成するコースとは異なり、３年間の博士後期課程がついていない修士２年間だけのコースです。２年間だけですが、院生同士の仲がとてもよくて、お誕生日会が開催されることや旅行に行くこともあります。また、教員の方や企業で働かれていた方等、社会人経験がある方の割合も比較的高く、しかも院生の専門が、教育行政・教育心理・教育史…といったようにそれぞれ異なるので、互いに刺激を受けることが多いコースとなっています。

私自身は、教育方法学という学問を研究するゼミに参加しています。このゼミには、教育評価やカリキュラム等について研究されている先生方・学部生・院生が参加しています。特別支援学校の教員を目指していることもあり、主に障害児教育について、このゼミで研究中です。

糸賀一雄の生産教育から

卒業論文では、障害児教育における職業教育を、大きなテーマとしました。その上で、糸賀一雄の思想や実践に焦点を当てました。糸賀一雄とは、戦後まもない頃に、戦災孤児・生活困窮児・障害児のための施設である近江学園を設立し、日本の障害児教育に大きな影響を与えたとされている人物です。糸賀は、近江学園設立当初から一貫して、障害がある子どもたちの教育として、生産活動を行うことを「生産教育」とよび、重視してきました。

卒業論文では、以下のことを明らかにしました。糸賀は、設立した各施設に在籍する子どもの障害がしだいに重度化するなか、障害の重い子どもたちに対する考え方を変化させることで、生産教育の目標を職業的自立から発達保障に転換させました。それと同時に、より障害の重い子どもたちも「生産」を行う存在であると認識し、生産教育の対象に含めるようになりました。これは、生産教育における「生産」が、経済的利益につながる活動から、それを包括する創作活動へ、そしてそれを包括する自己実現というように、より包括的なものとして捉えられるようになることを伴うものでした。

以上のように、生産教育に対する捉え方を変化させることで、生産教育において目指す子どもの

たなはし・あやか◉ 1987年千葉県生まれ。京都大学教育学部を卒業。現在は同大学院教育学研究科（専修コース）の2年生。学部時代の介護等体験で、知的障害がある方が働く作業所に行ったことをきっかけに、障害児教育について勉強するようになり、特別支援学校・特別支援学級でボランティアにも参加するようになる。特別支援学校の教員になることを目指し、教員採用試験にむけて勉強中の日々。

人格形成と生産教育がもつ社会にとっての意義を、糸賀はより深く捉えるようになりました。もちろん糸賀の生産教育は一貫して、子どもの人格形成を目指す教育であると同時に、社会にとっても意義がある教育でした。しかし、生産教育が目指す子どもの人格形成は、職業的自立という目標のもとでは経済的利益につながる活動を行う人格の形成という限定された意味合いであったのが、発達保障という目標のもとでは子どもの自己実現をとおしたより根本的な人格の形成と捉えられるようになりました。子どもの人格形成という目標により焦点をあてた教育として、生産教育がとらえられるようになりました。また、生産教育がもつ社会にとっての意義は、既存の社会にとって都合がよいという意味あいが強いものから、社会の人々の意識を変革することによって、新しい社会を作り出すという意味合いが強いものへと深められるようになりました。

明らかになったこのようなことを踏まえて、以下のような考察をしました。上記にあげた糸賀の生産教育に対する認識とその認識に基づく生産教育の実践の深まりは、子どもの人格形成という目標により焦点を当てながら、同時に、世間の人々の意識を変革することによって新しい社会を作るという意味で社会的意義を強くもつ障害児教育の可能性を提起しているといえます。そして、このような障害児教育のひとつとして、職業的自立を目指す職業教育を位置づけることは、子どもの発達要求よりも社会や企業の要求に応じた社会適応的な職業教育が行われがちであるという、歴史的かつ今日的な課題を乗り越える1つの方策を示しているといえます。

また糸賀の生産教育の深まりは、障害の重い子どもへの取り組みから教育のあり方を問い直し、すべての子どもの発達を保障する教育を構想することによって生じたものでした。この点に着目し、発達を保障する障害児教育の1つとして、職業的自立を目指す職業教育を位置づけることは、職業的自立を目指す職業教育の振興により、障害の重い子どもたちに対する教育がなおざりになる危険性があるという歴史的かつ今日的な課題を乗り越える上で重要な示唆を与えるものだといえます。

これからの課題

課題は山盛りですが、こんな卒業論文を書きあげました。修士論文では、卒業論文でみてきた近江学園や1963年に糸賀たちによって設立されたびわこ学園の実践の変遷について、より深くみていきたいと思っています。より具体的にいうと、1956年に近江学園に就職された田中昌人先生によって提起された発達観や指導理念が、近江学園やびわこ学園の教育指導体制に反映されるなかで、学園の指導者たちが子どものみかた・指導観をどのように変化させたのかという点について着目したいと思っています。またその結果、子ども・子どもと指導者の共感関係・教育実践がどのように変化したのかという点についても着目したいと思っています。以上のことを、近江学園・びわこ学園の年報等の検討や職員の方へのインタビューをとおして明らかにするなかで、田中昌人の提起する子どもの発達に着目した指導理念の意義と課題を探りたいと思っています。

研究は本当にまだまだなので、日本応用心理学会ではさまざまな立場の方から色々勉強をさせていただき、それを研究に生かしていければ…と思案中です。また、特別支援学校の教員を目指していることもあり、2年ほど前から京都市内の2つの保育園で発達診断を、昨年度4月から京都市内の小学校で総合支援員をさせていただいています。日本応用心理学会では、発達診断や小学校での実践を行う上で、何かヒントになることもつかめればと思っています。

糸賀一雄著作集刊行会編（1982）「糸賀一雄著作集Ⅰ～Ⅲ」日本放送出版協会

駒澤大学大学院人文科学研究科
心理学専攻

小野洋平

私の研究テーマについて

大学院での私の研究テーマは虚偽検出です。虚偽検出という言葉は聞きなれないかもしれませんが、「うそ発見」、「ポリグラフ検査」というと聞いたことがある方も多いのではないでしょうか。テレビや書籍などでこの検査の描写があり、比較的馴染み深いものだろうと思います。テレビ番組などでは芸能人に電極等を装着し、世間受けのする質問を行います。「○○さんと付き合ってますか」といった内容の質問を与え「いいえ」の返答を行わせます。すると記録ペンが大きく動揺し、会場にはその芸能人がうそをついているというような笑いが起こります。このように、メディアでおもしろおかしく取り上げられているために、一般的に虚偽検出検査に対する誤解があるように思います。虚偽検出検査では「虚偽を報告すると心身が動揺する」といったような特異的な反応傾向が必ずしも生起するわけではありません。また、うそをついているかどうかを必ずしも検査するものでもありません。1989年の証拠調請求事件（浦和地方裁判所昭和六十三年（わ）第585号）において、虚偽検出検査を実施してほしいという被告人の請求の可否を争う非常に変わった裁判が行われています。取調べの状況に関して被告人と取調官のどちらの供述が真実かを明らかにするために、双方へのポリグラフ検査の実施が請求されましたが、この請求は却下されました。「うそ」を見破る検査であれば、この請求は認められてもおかしくはありません。ではなぜ却下されたのでしょうか。それはわが国の虚偽検出検査の多くが「うそ」を見破る検査ではなく、事件に関する認識の有無を検査するものだからです。

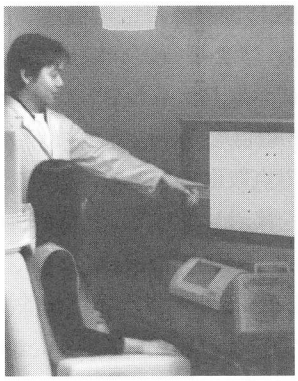
虚偽検出検査では秘匿情報検査（concealed information test；CIT）とよばれる質問法を用いて質問時における皮膚電気活動、呼吸運動、心臓血管運動といった複数の生理指標を測定します。CITでは、仮に殺人事件の凶器がナイフであった場合に、犯人以外知りえないような、事件に関連のある質問（「凶器はナイフですか？」）と事件に関連のない質問（「凶器はアイスピックですか？」）を被検査者に提示し、その際の生理的変化を分析します。もし被検査者が「凶器はナイフである」といったような事件に関する知識を有していれば、多くの場合、質問間で有意な生理的反応の差異が検出され、そのような知識を有していなければ反応差異は検出されません。このようにCITを用いた虚偽検出検査では質問間の反応差異をもとに事件に関する認識の有無を検討します。先の証拠調請求事件では、被告人も取調官も供述に関しての事実をすでに共有しており、虚偽検出検査を行うために必要な、被検査者しか知りえない質問を作成できないので、請求が却下されたのです。

では、事件の知識を有する場合に質問間の反応差異が生じるのはなぜでしょうか。実は、この点についてはまだはっきりしていません。反応差異が生じる理由を説明するために、情動要因を重視した理論、認知要因を重視した理論などさまざまな理論構築が現在も進められています。理論構築に対してはさらなる研究の余地があるとしながらも、1968年の最高裁判決以降、虚偽検出検査結果が裁判において証拠能力を有するものとして扱われているのは、被検査者が事件に関する知識をもっていること、また、事件に関連のある質問と

おの・ようへい◉北海道生まれ。2003年、駒澤大学文学部卒業。2008年、駒澤大学大学院人文科学研究科心理学専攻修士課程修了。2010年現在、同専攻博士後期課程の3年生。研究テーマは、科学的虚偽検出のあり方。研究においては、何事も自分自身の“眼”で見て確認することを心がけている。

関連のない質問の違いを識別していること以外に両質問間の反応差異を説明できないからです。

現在のところ虚偽検出検査は誰にでも適用でき、100%真偽を判定できるという万能な検査というわけではありません。CITは事件に関する認識を問う質問法でありますから、いわば記憶の検査です。実施するためには被検査者が正常な記憶能力を有していなければならず、認知症など記憶障害を伴った者への実施は技法上難しいのです。また、正常な記憶能力を有していたとしても記憶の忘却の問題があります。事件発生から虚偽検出検査が実施されるまでに長い年月が経過することもあり、反応差異は生起するものの、その差は時間経過とともに小さくなるといわれています。さらに、妨害行為によって適正な記録が取れない、もしくは反応を示さない場合もあります。虚偽検出検査では生理指標を測定するために電極等を装着します。測定器具を装着することにより、被検査者は測定指標を容易に想像できるため、虚偽検出回避努力の結果、測定データが意図的に歪められてしまうことがあります。この被検査者の意図的な妨害行為をカウンターメジャーといい、現在実務場面で採用されている皮膚電気活動、呼吸運動、心臓血管運動といった3指標に対する具体的なカウンターメジャーは複数存在することが報告されています。科学的な検査を行うためには、このようなカウンターメジャーを軽減し、検出効率を高めることが必須の条件です。


実験室場面における
虚偽検出検査

また、虚偽検出検査の判定では2つの過誤が生起することがあります。真犯人を陰性と判定するフォールスネガティブエラーと、無実の者を陽性と判定してしまうフォールスポジティブエラーです。疋田（1971）によれば、1964年から1971年までの実務における検査を調査したところ、フォールスネガティブエラーは7.8%、フォールスポジティブエラーは0.5%となっており、これらの過誤が少なからず生起していることが示されています[1]。検査結果が被検査者の人生を直接的に左右することもありえますので、この過誤の低減を目指した研究は不可欠です。

今後の課題について

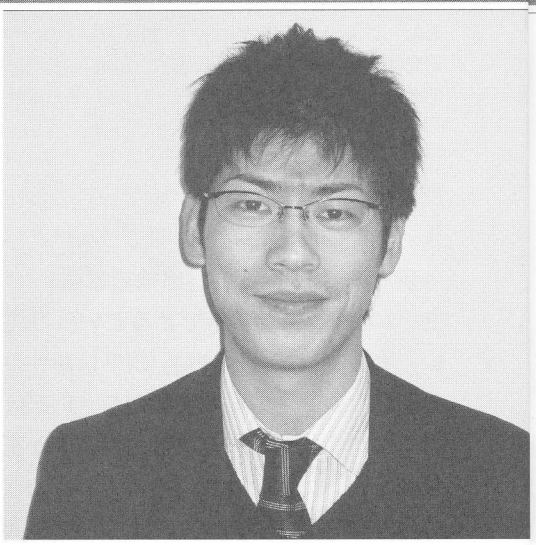
現在、虚偽検出研究に求められる課題は、反応メカニズムの解明、有効な反応指標の開発、反応分析法の開発であるといわれています[2]。駒澤大学谷口研究室では、主に有効な反応指標の開発、検出効率の向上を目指した質問技法の改良に関する研究を行っています。特に私はカウンターメジャーの軽減を目的とした電極装着を必要としない新たな指標の有効性を検討するため、眼球運動に着目しています。これまでも眼球運動を指標とした虚偽検出の可能性は指摘されていますが[3]、その測定は電極装着を伴うEOG法やビデオカメラ法が主であったため、カウンターメジャーの問題を回避することは難しかったのです。しかし、近年では科学技術の進歩により、非接触型の眼球運動測定機器が開発され、この問題をクリアできるようになりました。私が行っている虚偽検出の研究は、この非接触型の眼球運動の測定に関するものであり、ここで得られた研究成果はすでに日本応用心理学会をはじめ、日本心理学会やその他の学会で公表しています。

虚偽検出検査は裁判員制度による判決結果に与える影響も大きく、より科学的な検査を行う意義は前にも増して大きくなっています。今後の虚偽検出研究の発展が期待されるとともに、その一端を担えるよう日々研究に邁進したいと考えております。

1 疋田 圭男（1971）「ポリグラフ検査の有効性」科学警察研究所報告 24, 230-235
2 高澤 則美（2009）「ポリグラフ検査 - 日本における検査実務と研究の動向」生理心理学と精神生理学 27, 1-4
3 三宅 洋一（1978）「虚偽検出指標としての皮膚抵抗反応，血管運動反応及び眼球運動検討」科学警察研究所報告 31, 88-94

神戸大学大学院海事科学研究科
国際海事研究センター・研究機関研究員
大阪大学大学院人間科学研究科
特任研究員

中井 宏



なぜ応用心理学？

大学に入学し、いくつか心理学の講義を受講しました。「そこで応用心理学に興味をもって…」という書き出しなら良かったのですが、実際には「趣味の延長みたいな研究が多くて、なんの役に立つかわからんなあ」という第一印象でした。当時から研究者への道に興味があった私としては、「せっかく皆のお金を使って研究するなら、皆のためになるような研究をしたい」との思いがありました。また、とある先生からいわれた「医学者はどこに悪いところがあるか診察・診断をして、注射をしたり処方箋を出したりする。工学者は製品の問題点を抽出して改良品を製作する。でも、心理学者は問題や現象を指摘するけど、そこで終わる人が多い」との言葉も胸のなかにありました。そこで2年生の終わりに配属ゼミを希望する際、「研究成果を実際の生活に還元できること」を重視して、応用心理学系のゼミを選択しました。大阪大学には第二次世界大戦中の海軍パイロットの適性検査開発に端を発する交通心理学領域の系譜があり、応用心理学のなかでも特にドライバーを対象とした交通心理学に興味を抱きました。安全な交通社会の構築のために「役立つ」ことだけを考えれば、学童擁護員や駐車監視員のような活動をするという選択肢もありますが、研究者としてより多くの人たちに対して、社会的に貢献することを目指して現在も交通心理学の研究を実施しています。最終的には、免許既得者の更新時講習や処分者講習などの有効性をより高めるための研究成果を得ることが目標です。

これまでの研究

● リスクテイキング行動の一貫性検証

交通事故原因の1つであるドライバーのリスクテイキング行動（行為に伴う危険性を認識した上で、敢えてその行為を実行すること）について、観察法からその一貫性を検証しました。約2000台の車両に対して無信号交差点での通過行動を記録し、シートベルト着用者ほど交差点走行時の速度が低く、左右の安全確認回数が多く、一時停止率や合図履行率が高いことを示しました。さらに、リスクテイキングの規定因の1つと考えられている運転技能の自己評価について、さまざまな研究を実施しました。

● 運転技能の自己評価と不安全行動の関連

先の観察研究は大学キャンパス内で実施されたため、一部の車両についてはドライバーを特定し、質問紙調査と実行動との関連を比較することができました。その結果、自身の運転技能に対する自信が高いドライバーほど、走行速度が高く、左右の確認回数が少ないことが明らかとなりました。

また別サンプルを対象とした質問紙研究では、日常の運転行動の安全性に関する自己報告（「狭い道でのすれ違いでは、道を譲るようにしている」や「夕方には早めにヘッドライトをつけるようにしている」など18項目を5件法で尋ね、合計をsafety scoreとして点数化）を求め、運転技能の自己評価との関連を検討しました。技能評価は男性のほうが高い一方、safety scoreは女性が高く、さらに免許取得後3～5年のドライバーは、その前後の属性に比して技能評価が高く、safety scoreが低いことが示されました。

さらにドライビングシミュレータ実験を行った

なかい・ひろし◉1982年生まれ。2005年大阪大学人間科学部を卒業後、同大学院人間科学研究科博士前期課程に進み、2010年3月博士（人間科学）を取得。また2007年から2010年まで（独）日本学術振興会特別研究員としても研究活動に従事。現在は、神戸大学大学院海事科学研究科附属国際海事研究センターと大阪大学大学院人間科学研究科の研究員を兼務。専門はドライバーを対象とした交通心理学の分野で、特に安全対策の効果を阻害する可能性がある「運転技能に対する自信の高さ」に着目した研究を継続して実施。「役に立つ研究」を信念に日々奮闘中。

研究においても、運転技能の自己評価が高いドライバーほど先行車との車間が狭く、先行車がない状況では走行速度が高い、という結果がでました。

メンタルヘルスの観点からすれば、劣等感にさいなまれるよりも、自信満々に生きていくほうが好ましいかもしれません。しかし上述した私の研究結果からは、自動車運転の安全という観点からは、自信が高すぎることは必ずしも好ましくないといえるのです。

● 自己評価の正確性について

上述の自己評価に関する研究では、運転技能評価をすべて質問紙法によって収集しました。そのため、実際に技能が優れているために自己評価が高いドライバーと、過信があるために自己評価が高いドライバーを区別できない問題がありました。そこで現在は、自動車教習所指導員による評価を客観的な基準とし、それと自己評価を比較する手法を用いています。最近行った研究では、若中年ドライバーの多くが、指導員に比べて過大な自信を有することが示されており、そのような者ほど教習所場内コースや公道における実走行課題において不安全に振る舞うことが明らかとなりました。また、約2000名の自動車教習所卒業生を対象に、卒業検定に対する自己評価と検定員評価を比較したところ、免許取得前段階からすでに過大評価傾向が認められ、特に男性や若年者ほどその傾向が強いことが示されました。

自身の運転技能を過大評価することは、不安全行動の誘因となりうることに加え、安全教育の効果を阻害するおそれがあります。つまり、「自分はできているから関係ない」と思い、教育を受けても他人事と捉えてしまう可能性があるのです。そこで今後は、「いかに自身の弱点をなるべく簡便に知ってもらえるか」という観点から、容易に導入可能な自己評価スキル訓練の手法や内容の構築を目指すつもりです。

● ハード面での安全対策の有効性

自己評価の問題だけでなく、道路環境改善のための工学的安全対策の有効性検証も実施しています。大学キャンパス内のT字型無信号交差点内に敷設された台形ハンプ（ハンプ上面のフラット部と勾配の付いた擦り付け部から成り、およそ台形の鉛直断面をもつ道路構造）が、当該地点を通過する非優先側車両に及ぼす効果を観察法によって検討しました。台形ハンプを設置することにより、交差点への接近速度や進入速度が低下することが示され、主目的である速度抑制が達成されました。また、速度の面だけでなく、非優先車両のドライバーの左右を確認する行動にも良い影響をもたらすことが示され、狙いとした側面以外にも効果が波及することが明らかとなりました。

しかし、設置直後だけでなく、3ヵ月後、半年後、1年後と観察調査を縦断的に行ったところ、その効果は小さくなることも示されました。つまり、道路環境を工学的に改善しても、ドライバーの慣れなどの問題により、時間経過とともに効果が小さくなるといえます。このことから、安全な交通社会実現のためには、車両や道路などハード面での対策だけでなく、自動車を操作する人間を対象とする応用心理学的研究が今後ますます重要といえます。

最後に

先述のとおり、私自身は「役に立つこと」が非常に重要と考えています。そのためには、実験室や文献内の問題が実際場面での問題に即していない可能性も往々にしてあるため、現場の実態を把握しておく必要があると思います。ただし、現場の実務者ではなく研究者である以上は、より学術的な視点に立ち、基礎的な原理や原則をしっかり押さえ、両者のバランスを常に考慮すべきです。この点については、今後も学会の内外において、諸先生方からのご指導をお願いする次第です。

中井　宏・臼井伸之介（2006）「運転場面におけるリスクテイキング行動の一貫性検証」応用心理学研究 32（1），1-10

中井　宏・臼井伸之介（2007）「運転技能の自己評価がリスクテイキングに及ぼす影響」交通心理学研究 23（1），20-28

東北大学大学院文学研究科
人間科学専攻

引地博之

私の経歴

私は、修士課程まで土木工学科に在籍し、地域づくりについて勉強していました。現在の地域づくりでは、人々のライフスタイルや価値観が多様化するなかで、地域住民にとって満足度の高い整備を行うだけでなく、そうした事業の円滑化を図ることが課題として挙げられています。

土木事業に対する世論はやや厳しいものではあります。しかし、自然災害が多い日本では、洪水や地震に備える必要がありますし、高齢化が進めば、歩道などのバリアフリー化が求められます。人々の快適な暮らしを守るためには、日本の自然環境や社会状況に合わせて、都市や居住地域を整備しなくてはなりません。

しかし、近年では、人々の暮らしに役立つはずの整備の実施が困難になっています。高度経済成長を経て、日本の国民は他の先進国と同等の生活水準を獲得したことから、価値判断の際には、経済合理性だけでなく、暮らしの豊かさや快適さ、ゆとりなどの質的側面も重視するようになりました。こうした価値観の変化は社会資本整備に対する態度にも現れており、たとえば、公共事業の実施に際して、事業による利便性や安全性の向上だけが強い説得材料とはならず、自然環境や居住環境、あるいは個人のライフスタイルに対する影響への懸念から、事業に対して住民の合意が得られない事例が多く報告されています。この問題の解決には、住民の多様なニーズを捉え、利害調整を行うことが求められますが、そのためには、住民が地域に関心をもち、議論の場に参加することが必要だと考えます。すなわち、住民が地域づくりに関与することが円滑な合意形成を実現する上では重要になります。

私の研究では、上記の問題意識に基づき、住民の地域づくりへの関与を促す心理要因について検討してきました。近年、多くの研究者によって、住民の地域コミットメントが地域づくりへの関与を促すと報告されています（たとえば、田中・轟・中嶋・多和田、2008[1]）。地域コミットメントとは、住民が居住地域に対して抱く愛着、誇り、それに帰属意識のことであり、一言でいえば、地域のことをわがことと感じる姿勢です。これまで、私は地域コミットメント形成の心理機構ついて検討してきました。今回は、その1つをご紹介いたします。

研究の関心：地域の歴史資産と住民の地域コミットメントの関係

歴史まちづくり法の制定にみられるように、歴史資産を活用した地域づくりに高い関心がもたれています。歴史資産には、遺跡や歴史的建造物などの有形の資産に加えて、祭り、伝統行事、それに説話などの無形の資産も含まれます。住民の地域コミットメントは、歴史資産との関わりによって、強くなることが示唆されています[2]。このことから、歴史資産をうまく活用すれば、地域の歴史的風致が維持されるだけでなく、住民の地域づくりへの積極的な関与も促されると考えられます。そこで、

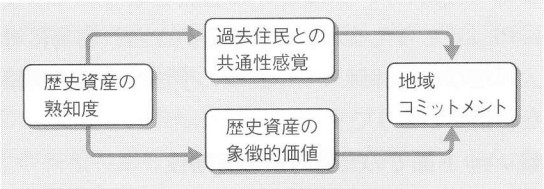


図1　歴史資産の熟知度が地域コミットメントを強める心理機構

ひきち・ひろゆき◉1982年宮城県生まれ。東北工業大学大学院工学研究科土木工学専攻博士前期課程修了。現在、東北大学大学院文学研究科人間科学専攻（心理学）博士後期課程に在学中。快適で安全な居住環境をつくるためには、住民が居住地域に関心をもつことが重要だと考え、住民の地域づくりへの関与を促す心理機構について研究している。

歴史資産が地域コミットメントを強化するメカニズムについて、モデルを提案しました（図1）。

このモデルは、産業・組織心理学分野で行われてきた組織コミットメント研究の知見に基づきます。組織コミットメントとは、「特定の組織に対する個人の同一化あるいは関与」と定義され[3]、これが強い社員は職務外のことでも熱心に取り組むことが報告されています。その規定因の1つには、勤め先が有名企業であるとか、世間の評判が良いことによって、社員の自尊心が満たされることが挙げられます[4]。すなわち、会社の社会的評価を象徴する要因が組織コミットメントを強化すると考えられます。このことに従えば、歴史資産が地域コミットメントを強める理由として、その資産がマスコミで取り上げられるなど、多くの人々の関心を引くものであるという認識によって、地域住民としての誇りが満たされることが挙げられます。

しかし、社会的に評価の低いものや、その地域が悲劇の地であったことを伝える負の資産によっても、住民の地域コミットメントが強められる可能性があります（たとえば、Devin-Wright & Lyons, 1997[5]）。このような帰属意識の高揚過程は、象徴的価値説では説明が難しいといえます。

過去の出来事に関する伝承とそれを象徴する記念物は、良い出来事であれ悪い出来事であれ、その当時の住民の生活と心情を偲ばせます。そうした歴史資産との関わりをとおして、人々は祖先や過去の地域住民が自分たちと同じ行為に従事していたことに気付くと考えられます[6]。このことから、地域の歴史資産に触れる現代の人々は、かつてこの同じ場所に住み、同じ風景をみながら生きた過去の人たちに対して、親近感や共通性を感じるでしょう。それは、自分と過去の住民たちが結びついているという歴史的連続性の感覚です[7]。私は、歴史資産は過去住民との共通性の感覚を生み出すことによって、現在住民の地域コミットメントを強めると仮定しました。また、このモデルの左端には、地域コミットメントの個人差要因として、「歴史資産の熟知度」という変数を仮定しています。

このモデルは、歴史資産地域が多く残る地域（京都市東山区、左京区、神奈川県鎌倉市、福島県会津若松市）と新興住宅団地の多い地域（兵庫県三田市、神奈川県横浜市緑区、宮城県仙台市太白区）を対象とした社会調査のデータによって妥当性が支持されました。今回のデータは、横断的なものであるため、「居住年数」によって疑似相関が生じている可能性も懸念されましたが、その変数を統制してもモデルの妥当性は支持されました。

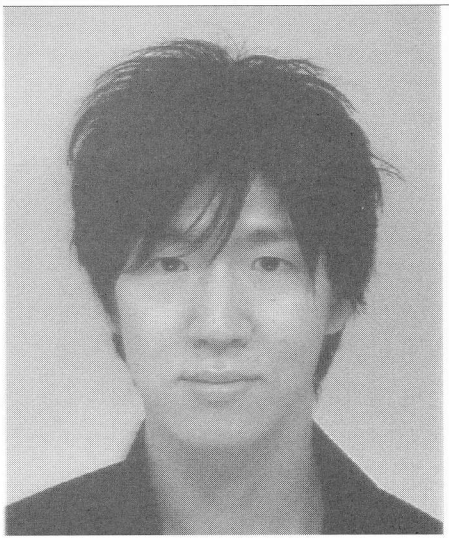
分析結果は、「過去住民との共通性感覚」が「象徴的価値」と同等以上に地域コミットメントを強化しうることを示しました。このことから、住民の積極的な地域づくりへの関与を促すためには、祭りの際などに、過去住民も同じように参拝していたことを示すなど、過去住民との共通性感覚を高める仕掛けを作ることが有効になると考えられます。

以上が、現在、私が興味をもって取り組んでいる研究です。機会がございましたら、御指導御鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

1 田中尚人・轟 修・中嶋信恵・多和田雅保（2008）「風土に根ざしたインフラストラクチャー形成に関する研究―柿野沢地区の道普請を事例として―」土木学会論文集 D64, 218-227.
2 Hayden, D.（1995）The power of place: Urban landscapes as public history. Cambridge: The MIT Press.（後藤晴彦・篠田裕見・佐藤俊郎（訳）（2002）場所の力：パブリック・ヒストリーとしての都市景観　学芸出版社）
3 Porter, L. W., Steers, R. M., Mowday, R. T., & Boulian, P. V.（1974）Organizational commitment, job satisfaction, and turnover among psychiatric technicians. Journal of Applied Psychology, 59, 603-609.
4 Lim, V. G., Teo, T. H., & See, S. B.（2000）Perceived job image among police officers in singapore: Factorial dimentions and differential effects. The Journal of Social Psychology, 140, 740-750.
5 Devin-Wright, P. & Lyons, E.（1997）Remembering pasts and representing places: The construction of national identities in Ireland. Journal of Environmental Psychology, 17, 33-45.
6 Mazumdar, S. & Mazumdar, S.（2004）Religion and place attachment: A study of sarcred places. Journal of Environmental Psychology, 24, 385-397.
7 Sani, F., Bowe, M., & Herrera, M.（2008）Perceived collective continuity seeing groups as temporally enduring entities. In Sani, F.（Ed.）, Self continuity. New York: Psychology Press. pp. 159-172.

大正大学大学院人間学研究科
福祉・臨床心理学専攻

長内優樹



無気力の2つの側面

「なにもやる気がしない」「○○をしなくてはいけないけれど、やる気がでない」などといった、いわゆる無気力とよばれる状態を経験したことは、誰にでもあると思います。ちなみに世間一般では、エナジードリンクの高い売り上げをはじめ、無気力から脱出するための方法や、下がってしまった意欲を向上させるための非専門的な著書やセミナーなどが盛況しています。このような現状から、個人が日常生活において主観的に経験する（つまり非病理的な）無気力への対処方法には、社会的に高い関心が寄せられていることがうかがえます。

また、他方では「最近の学生は無気力だ」「やる気のない部下ばかりで困る」などといったように、他者が自分の思いどおりに行動してくれない理由を彼らの意欲に帰属する際にも、無気力という言葉を多く用います。こちらもまた、一般的に広く問題とされる無気力であるといえます。

このように一言に無気力といっても、知覚（自覚）された自己の意欲の低下（認知的側面の無気力）と、他者からみて無気力にみえる状態（行動的側面の無気力）があり、双方は基本的に別々に考えるべき現象です。

私の関心と先行研究

私の関心は、認知的側面の無気力にあります。最終的な目的は、認知的側面の無気力から脱出したいと切望する個人に対して、実証的知見に基づいた効果的な対処方法を開発し提供することです。しかし、意外なことに、これまでの心理学における無気力に関する研究は、認知的側面の無気力に焦点を当ててはきませんでした。無気力に関する先行研究は、以下の4つの立場に大別できます（ここでは、認知症の症状としての無気力は除く）。第1に無気力を学習性無力感とみなして研究する立場、第2に無気力を抑うつとみなして研究する立場、第3にスチューデント・アパシーを研究する立場、第4に個人が日常生活において経験する無気力を研究する立場があります[1]。これらの立場のなかで、認知的側面の無気力を研究する上での、直接的な先行研究となるのは第4の立場のみです。また、この立場は、近年の日本において始まったばかりで、たとえば「何もやりたくない」といったような生活全般に対する無気力を扱っています。しかし、私たちは、たとえば「部屋を片付けたいけれど、やる気がでない」など、特定の領域（課題）に対する無気力も経験します。そこで私は、研究をより包括的に進めるために、認知的側面の無気力を新たに「知覚された無気力（perceived apathy）」と名付け、便宜的に定義と分類を行いました[2]。

知覚された無気力とは

私は、知覚された無気力を「個人が知覚した自己の意欲、または精神的なエネルギーの低下」と定義し、また、それを「領域固有的無気力（domain-specific apathy）」と「領域全般的無気力（domain-general apathy）」に大別しました[1]。領域固有的無気力とは、特定の領域に対する無気力であり、たとえば「試験勉強をしなければならないけど、やる気がでない」「就職活動をしなければいけないけれど、やる気がしない」など、無気力が知覚される課題はさまざまですが、日常的に

おさない・ゆうき◉1982年埼玉県生まれ。2005年駿河台大学現代文化学部卒業。東京国際大学大学院社会学研究科修士課程修了。現在、大正大学大学院人間学研究科博士後期課程の3年生。学部時代に、臨床心理学関連の講義にて、スチューデント・アパシーの研究に関心をもつ。モチベーションのセルフマネージメント技法や無気力に対する介入方法の開発をめざし、「知覚された無気力」の基礎的研究に従事。特定の理論や方法に依拠せず、研究目的とする現象に合わせて、適切なアプローチを選択することがモットー。

誰でも感じうる無気力です。また、領域固有的無気力は、個人にとって興味・関心のある領域に対してのみ知覚されるという特徴があります。このように、領域固有的無気力は、特定の領域に対して興味・関心があるのにもかかわらず、意欲が出ないことの自覚といえます。

それに対して、領域全般的無気力とは、特定の領域に対してではなく、生活全般に対する無気力であり、たとえば「何もやる気がしない」などといったものです。このように、領域全般的無気力は、特定の領域に対するものではなく、すべての領域に対して意欲が出ないことの自覚といえます。

知覚された無気力の測定方法

私は知覚された無気力を“どの程度の強さで感じているのか”といった主観的な強度の感覚として捉えることにしました。このように、主観的強度を研究の対象とすることの利点としては、われわれが日常生活で知覚する無気力に経験的に近く自然であるため、調査時における調査協力者の認知的負荷を低減させ、回答を容易にするであろうことと、それによって生態学的妥当性の高い結果が期待できることが挙げられます。

そこで私は、単一項目によって特定の気分の主観的強度の回答を求める方法であるVisual Analogue Scale(VAS)を、調査研究に適した形に応用したMethod of measurement for Subjective strength of Perceived apathy by Single item(MSPS)という方法を新たに提案し、その有用性を検討しました[3]。

知覚された無気力と否定的感情

知覚された無気力は、否定的な感情との関係が容易に想定できます。そこで私は、領域全般的無気力、領域固有的無気力それぞれについて、抑うつなどの否定的な感情との関連を検討しました[4]。その結果、領域全般的無気力は、否定的感情と相関関係にあるが、領域固有的無気力は、私が想定した領域では、否定的感情と相関関係にある領域はみられませんでした。このことは、領域全般的無気力は、抑うつの複数の症状（感情、認知、意欲、身体）のうちの1つとしての無気力である可能性を示唆しています。また、領域固有的無気力が、否定的感情と関連しないことについては、今後の詳細な研究が必要だと考えています。

このように、知覚された無気力を研究することは、私の最終的な目的である対処方法の研究を行う上での基礎的な知見として重要です。加えて、このような非病理的な無気力を研究することは、抑うつや認知症などの症状としての病理的な無気力を理解する上でも意味があると考えています。

今後の展開

以上のとおり、私の研究は目的を達成するために、さまざまな分野の知見を組み合わせて用いています。たとえば、MSPSの原型であるVASは、精神医学や臨床心理学の分野で使用されている方法論です。このような異分野横断的なアプローチは、言葉のとおり応用心理学的であると、私は考えています。しかし、こうした応用性の高い研究の正当性や評価については、さまざまな視点からの吟味が必要です。そこで今後は、研究結果を国内外問わず積極的に発表していこうと考えています。また、既出の論文などについては頂戴したご指摘なども含めweb（http://yukiosanai.com/）にて公開しています。コメント欄は匿名で投稿可能ですので、忌憚のないご意見ご批判をいただければ幸いです。皆様、今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

1 長内優樹（2010）「無気力に関する心理学的研究の展望—健常な個人が日常的に知覚する無気力を研究するために」応用社会学研究　東京国際大学大学院社会学研究科 20, 83-94
2 長内優樹（2009）「大学生における知覚された無気力の研究—領域固有的無気力が領域全般的無気力に及ぼす影響」応用社会学研究　東京国際大学大学院社会学研究科 19, 101-112
3 長内優樹（2009）「知覚された無気力の主観的強度の測定法に関する研究」応用心理学研究 35(1), 23-24
4 長内優樹（2009）「大学生の領域固有的無気力と肯定的気分および否定的気分の関連性の検討」応用心理学研究 34(1), 52-53

大学探訪

研究室におじゃましました

応用心理学の教育を考える
中京大学心理学部

尾入正哲（中京大学心理学部教授）

心理学を分野の垣根を越えて学ぶ

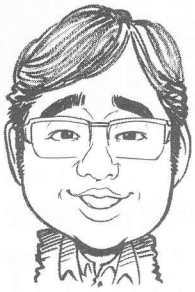
中京大学心理学部は、文学部心理学科を改組し2000年に日本の大学ではじめての心理学部として開設されました。学生定員は1学年160名で、心理学部心理学科の1学科制をとっています。本学心理学部の特徴の1つは心理学について特定の分野に偏ることなく、心理学の全体像を意識して幅広い視点から教育・研究を行うことにあります。その理念に基づいて、心理学の諸分野を代表する、基礎心理学、応用心理学、発達心理学、臨床心理学の4つの領域を設け、計20名の教員の連携により学生の教育にあたっています。ここで領域というのは、他大学での「○○コース」というような意味ですが、学科・専攻に細かく区分することなく、心理学を分野の垣根を越えて学ぶという本学部の目標を具体化した1つの表れといえましょう。

応用心理学領域について

そのなかで応用心理学領域は、主に実験心理学的な手法を基にして、実社会の問題解決を志向する専門分野であり、このように「応用心理学」の名称を公式に使っているのは、全国の大学のなかでも数少ないのではないかと思います。現在、応用心理学領域には、岸田考弥教授、向井希宏教授、矢野円郁助教、尾入の4名の教員が所属し、学生の指導にあたっています。今回は、こうした心理学部という大枠のなかで「応用心理学」の専門教育にあたっている立場から、心理学の教育、特に応用分野の教育について本学の実態を紹介しつつ、日頃感じている事柄を述べたいと思います。

心理学部全体の教育体系としては、実験心理学を基礎とする、かなりオーソドックスなカリキュラムが組まれているといえます。学部1～2年次を通じて、心理学概論、基礎実験実習、統計法、コンピュータを用いたデータ解析などの基本的な科目が配置され、心理学の基礎的な知見や研究手法について学生に習得させます。また、1年次から講読演習という少人数のゼミ的な導入教育が行われているのも特徴の1つであるといえます。入学後、多くの学生はそれまでもっていたイメージを改めて、心理学には実験的・理系的な要素が大きいという印象を抱くようです。

応用心理学に関する専門科目としては2年次に応用心理学概論を学びます。領域ごとに基礎心理学概論や発達心理学概論といった科目があり、それぞれの研究分野に関する、やや専門的な授業が行われます。応用心理学概論では、産業心理学をはじめ、心理学の応用について幅広く取りあげて、学生の興味・関心を引き出すことに留意しています。心理学部に入学してきた学生にとって、心理学は「何となく社会のいろいろな所で役立ちそうだ」という印象はもたれているものの、具体的に応用的なテーマとして、どのような課題があるのかは、あまり認識されていないようです。特に産業界での心理学の活用については、ほとんど知られていません。そこで、ヒューマンエラーや事故防止、組織内の



尾入正哲（おいり・まさあき）◉ 1981 年京都大学文学部卒業、1985 年京都大学大学院文学研究科博士課程中退。（財）労働科学研究所研究員、京都大学文学部助手、京都府立大学福祉社会学部助教授・教授を経て、2007 年より中京大学心理学部教授。専門は産業心理学・認知心理学。ヒューマンエラーと事故防止、オフィス環境の快適性などのテーマを扱っている。

人間関係、人間工学による作業性の改善など、産業心理学の内容は学生にとって新鮮なものに感じられるようです。

3 年次からは学生は各教員のゼミに分属して卒論に向けての取り組みを始めます。実際にはゼミ分属以降が、各領域別の専門教育の段階になります。応用心理学領域では、産業心理学、組織心理学、人間工学、交通心理学、環境心理学、照明・色彩心理学など、心理学の応用分野に関わる多くの科目が開設されています。ゼミの分属について、最近は応用心理学のゼミは比較的学生の人気が高い傾向がみられます。以前から臨床心理学の人気はやはり高いのですが、最初から臨床心理学志望の学生を別にすると、それ以外では応用心理学を希望する者が多いようです。先に述べたように、学生にとって職場や産業界の話題は新鮮に感じられることの他に、企業への就職に有利というようなイメージがあるのかもしれません。

産業現場の実態にふれる実習

授業のなかでユニークなものに応用心理学実習があります。産業心理学を学ぶといっても、就職前の大学生にとって職場や作業現場の話には実感がありません。そこで工場見学や企業の方々の講演などを通じて、少しでも産業現場の実態にふれることを目的に、この授業が設けられています。最近は、近隣の各種の工場や発電所の見学などを実施して、実際の職場における作業安全や労働衛生といったヒューマンファクターへの取り組みを紹介しています。今秋には、愛知県内の地場産業の代表例である瀬戸市の窯元の見学を実施し、全国的な有名ブランドの陶器が県内で生産されていることや、伝統産業の分野でも粉じん対策などの労働衛生に関する取り組みが以前からされていることに認識を新たにしました（写真 1）。

写真1　瀬戸市での窯元見学

近年は応用心理学実習の授業の一環として、毎年夏季に瀬戸内海での船舶実習を行っています。これは神戸大学海事科学部のご協力により、2 泊 3 日で練習船に乗って体験航海を行い、船内で行われる作業を身近に経験して、さまざまな現場作業の様子を実地に学ぶものです。船のなかには多種多様な作業があります。ブリッジでの操船には航海士の判断や、クルー間の密接なコミュニケーションのような要素が含まれますし、エンジンの唸る機関室では騒音の激しい環境での作業の様子が体験できます。航海体験のなかで、いろいろな現場作業のエッセンスや作業環境の問題などにふれて、講義だけでは実感のわきにくい産業心理学のテーマについて理解を深めるのが船舶実習の目的です。楽しく有意義な経験として学生の評判もよく、応用心理学のゼミの学生だけでなく他の領域の学生も参加しています（写真 2）。

写真2　船舶実習（操船体験）の様子

各研究室のテーマについて

ここまで主に応用心理学領域の教育カリキュラムの内容について述べてきましたが、各研究室の研究テーマについてもふれておきます。本領域の現在の３名の教授は、いずれも産業心理学をベースにしている点で共通する面も多いのですが、そのなかでもそれぞれの特徴を活かした研究を行っています。岸田研究室では、主に交通心理学・人間工学的テーマを扱っており、県内の交通事故多発地点のフィールド調査や、自動車部品工場の作業改善といった課題に大学院生を中心に取り組んでいます。向井研究室は、作業習熟・技能などの産業心理学の伝統的課題について地道な研究を続けています。また、ここ数年は高齢ドライバーの事故防止について、自動車教習所との連携のもとに高齢者講習の教育効果に関する研究を行っています。尾入研究室では室内環境の快適性や空間認知・方向感覚といった、いわば建築心理学的なテーマを中心に研究活動を行っています。色彩やインテリアデザインなどの分野は学生の関心が高く、尾入ゼミからは住宅や不動産関係に就職する卒業生も出ています。

中京大学というと、最近ではフィギュアスケートや附属校の甲子園優勝などもあり、以前からスポーツの盛んな学校というイメージがあるかと思います。心理学部の他にも、体育学部ではスポーツ心理学に関する研究や、現代社会学部では社会心理学的な研究が行われています。産業心理学以外にも心理学の応用分野は、スポーツなどのさまざまな方向に広がっています。心理学部としても、心理学の応用の進展に対応して教育・研究の新たな方向性を探っていきたいと考えています。

応用心理学への今後の課題

さて、ここまで心理学部応用心理学領域の内容について紹介してきましたが、最後に応用心理学を教える教員として、日頃の経験から感じている今後の課題について少し述べたいと思います。第一には、応用心理学の守備範囲をどう考えるかということです。応用なので社会のニーズに幅広く応えるべきなのはもちろんですが、果たして幅広いだけでよいのか、また産業心理学以外の分野、たとえば消費者行動や社会福祉、地域コミュニティなどのフィールドをどう扱うかといったことが本領域の課題です。第二には、学生に教えるべき応用心理学の基礎とは何かということです。応用心理学のなかにもさまざまな分野があります。それらに共通した応用心理学固有の基礎知識や方法論とは何かを再検討して、カリキュラムを洗練していくことが必要でしょう。第三には、こうした教育を通じてこれからの応用心理学の研究者・教員をどのように育てて行けばよいのかという後継者養成の課題があるように思います。

これらをまとめれば応用心理学のアイデンティティはなにかという問題に行きつくことになります。大学教育の枠内だけでなく学会全体としても、応用心理学のアイデンティティ確立に向けて、こうした課題への取り組みが今後必要になってくるのではないでしょうか。

職場探訪

生活・労働条件の合理的な改善を目指す実践科学

財団法人労働科学研究所

越河六郎（松蔭大学経営文化学部教授）

「探訪」というと、大抵は訪れる組織の外部の人、たとえば記者など第三者によるものだが、筆者は当研究所のOBなので、いささか気がひける。何分お許しいただきたい。

ふつうOBとなると、現役の人たちになにか口出しなどしようものなら“外野うるさいぞ”と扱われる存在でもある。世のならいであろう。こういった「外野」、つまり、少し外側という立場で報告させてもらうことにした。

最近の財団法人労働科学研究所（所長・酒井一博氏）の組織運営、研究・社会的活動等に関しては、研究所の「年報」に詳しく記載されているので割愛する。

ここでは『労研の生い立ち』（桐原葆見著）にもとづいて、労働科学の理念、研究・実践の経過などを尋ねてみた。

研究所の設立

1921年（大正10年）7月、倉敷紡績社長大原孫三郎が、大原社会問題研究所の社会衛生部門を発展させて、倉敷労働科学研究所（倉敷）を創設した。まさに、『女工哀史』（細井和喜蔵）の時代であって、当時の紡績女工の劣悪な労働条件に深い関心をもった一経営者のヒューマニズムと科学尊重の精神に根ざした先駆的な業績として、わが国労働衛生史上高く評価されている。

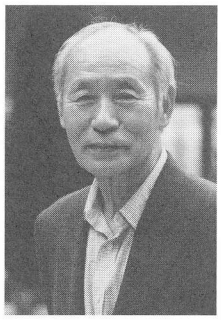
思想弾圧が進む時代であった。今でこそ『女工哀史』は広く読まれている本の1冊ではあるが、この種の書物をもっていただけで思想犯として捕らわれた人も多かった。そういう時勢に向かっていた頃である。研究所の名称「労働科学」にも苦心があったという（桐原）。「労働」または「科学」という言葉自体が思想性を問われていたからである。こういった思想性についての偏見は未だに続いているようだが、それは労働科学の本来の趣旨を理解されていないことによると思える。

大原社長の科学尊重の精神とはなにか。研究所を設立するに当たっての基本理念のなかにその一端を垣間見ることができる。それは、経営管理、たとえば労務管理にあたって、制度的（社内）に設定されている労働条件の妥当性を客観的に、その意味で科学的に検証し、それらのデータを基に管理施策を行うという点である。大原社長は、倉敷労働科学研究所を設立する前に、関連する現場調査を早稲田大学に委託したという記述が見られる。大原孫三郎社長の生涯に関しては、『わしの目は10年先が見える』（城山三郎、1994）がある。

研究所の設立当初、女工の健康状態と産業疲労に関する実験的研究に着手、生理学、心理学、衛生学の部門で、暉峻義等、桐原葆見、石川知福の先達が学際的な応用科学としての労働科学を定着させた。1937年、財団法人労働科学研究所として独立し、現在に至っている。

労働科学の領域と研究理念

労働科学とは「医学と心理学とを柱として労



越河六郎（こすごう・ろくろう）◉1932年宮城県生まれ。1961年財団法人労働科学研究所入所。労働生理・心理学研究部所属し、研究部長、副所長を経て、現在は松蔭大学経営文化学部教授、労働科学研究所主管研究員。専門は産業心理学。第1回「桐原賞」受賞。

働と生活に関する生物学的研究」と、基本的範囲を定め、生活・労働諸条件の合理的な改善に役立てようとする構想が展開された。「合理的な改善」といっても、テーラー, F.W. の『科学的管理法』（1911）によって代表される経営合理化運動とは異なる。「労働科学は人間の労働を研究する実践科学である」とし、経営志向だけに走らず、「働く人間を中心に考える方向」を示した。「真実に合理的な労働と生活の条件を求めて止まない応用科学」であり、つねに実践が要請されている領域なのである。そこには、「研究の対象ではない、問題があるのであって、研究とはその問題を解決することなのである」。言葉を変えて言えば、「机上の理論を職場等で検証するという“研究”とは異なり、労働・生活場面で生起している問題が先にある」ということになろうか。

労働科学はテーラーイズムの批判（暉峻）から始まったとされているが、この「科学的管理法」について若干ふれておく。たしかに、経営内はともかく、学界各方面から批判されるところは多々あった。しかし、産業心理学（桐原）の領域では、テーラーのやり方をすべて否定したわけではない。標準作業量を決定するために取った方法、作業分析と時間研究は、人間作業の各要素への知見を開発せしめ、管理上の行き当たり主義に覚醒を与えたこと、適材選択と養成方法の重要さを知らしめたことなど、評価すべきところも指摘している（桐原葆見、『産業心理学』1938）。

研究方法論

労働科学の研究課題は時代の推移に伴って広範に及んでいるが、研究の成果は、主として、機関誌『労働科学』（1924年創刊、2009年85巻）に掲載されてきている。研究の方法論に関連するところを2、3あげてみる。

『労働科学』第1巻に、「社会的生活条件と知能の発達―殊に、労働者階級児童の知能に就いて―」という論文（桐原）が発表されている。親の職業的地位による、生活環境条件の差が、その子弟の精神的発達にいかなる影響を及ぼしているかを問題にした研究である。この調査では、まずもって、「社会的環境条件の差」をどうして捉えるかに苦心したとある。経済的条件として、「親の収入」を訊いたが、応答のとおりかどうかはわからない。「応答」は単なる報告でしかないというのである。「影響」という動的な面をつめて考えるとき、甚だ大雑把な「分類」で環境条件の「差」を扱わざるを得ないという、研究方法上の「はがゆさ」を伝えてくれている。

この研究は、1946年から1955年までの10年間にわたる、児童の小学校入学より中学校卒業まで、毎年同一方法により、知能および運動能測定を行った「精神的発達に関する逐年的研究」（狩野広之、1970）に展開している。男女児童714名を対象として、9年間、1年も欠かさずに測定できた同一対象者は243名。社会的生活条件と知能の発達、職業階層と心身発達との関係を捉えるほか、児童の生活行動（生活時

間)、家庭の教育条件についての調査も実施されている。縦断的研究の困難さを克服しつつ、労働科学の視点が随所に表明されている。

社会的生活条件と心身の発達に関する研究は、さらに、医学、心理学、社会・経済学の研究者による総合研究「最低生活費の研究」(1956)のなかでも進められており、同研究第3編、「生活水準と知能、および、よみかき能力」として報告されている。ここでの「生活水準」とは、主に経済的条件によるものだが、住居の「畳数」をインデックスにして、それと児童の知能指数との相関を求めたりしている。ここでも、家屋の広さが経済的に裕福か貧困かを仮定できるかどうか、それを確かめるのが前提になる。この点が方法論的に労働科学の主眼となるところである。

労働能力に関する研究としては、独自の職業適性検査の開発がある。知能検査をベースにして、動作検査、性格検査等を含む。いわゆる就職・採用試験等での、合否を決めるためのテストというよりも、就職後の職務配置等、職業生活適応を促す方策として活用する使い方がなされている。こういった職業適性研究も、労働科学の主要なテーマである作業研究、作業特性の分析が基本となっていることはいうまでもない。作業研究は、人間の労働として妥当な条件設定になっているかどうかを問う「労働負担の研究」に負うところが大きい。広い意味で、労働科学は「労働負担の研究」ということもできる。

産業安全・労働安全に関する研究でも特筆すべき成果をあげている。『不注意物語—労働災害の事例研究集—』(狩野広之、1957)である。「事例研究法」の典型として、安全研究における教科書の1つになっている。

研究と運動

労働科学は実践科学として、つねに労働・生活条件の改善が要請されている。といって、有意義な研究成果が得られたとしても、それらがすぐ活用されるわけにはいかない面がある。労働・生活を取り巻く諸事情が複雑に絡み合っている現実があっての話だからである。そこで、「改善」にもっていくまでには、いきおい「運動」に傾斜せざるを得ない段階の生ずることも否定できない。

こんなエピソードがある。ある企業の労組幹部の人が、常務理事であった桐原先生の研究室に来て相談された(1962年)。「女性の生理休暇を権利として取得できるよう運動したいのだがどんなものでしょうか」という質問である。先生は即座に答えられた。「それはどうだろうかね。(生理で)苦痛が激しかったら休みが取れればよいのではないか。権利云々とは違うね」。当時は母性保護という考え方が基調で、労働組合運動も盛んな時代であったが、先生は常に科学的な研究に拠り所を求める姿勢を貫いておられた。

現場主義

労働科学は、現場(労働生活の現実場面)の「問題」を解明して、合理的な条件への改善を求めていくとしたが、研究にあたってはその「現場」を把握し理解することが先である。これが「現場主義」である。"現場主義"という表現は、『教育と心理の巨人達』(放送大学教育振興会、2010)、「桐原葆見」の章(星薫)にもみられる。

「桐原葆見」探訪、という形になってしまった。「人類は働いて生きる、という仕組みを作ってきているが、その主体はあくまで人間であることを忘れてはならない。経済や技術などの単なる僕では決してないのである」。これが桐原さんの「思想」の源泉である。

『労働の生産性—桐原葆見の労働科学—』(太田垣瑞一郎、越河六郎編著、労研出版部2006)を参照されたい。

CROSSROAD ESSAY
私と応用心理学

❶

応用心理学が果たす役割の大きさに新鮮な驚きを感じる

当時、まだ神田駿河台（JR中央線御茶ノ水駅下車）に中央大学があった頃、私は経済学部の学生として通学していた。学園紛争の末期でもあったが、バリケード封鎖、大学当局によるロックアウト、学生と機動隊との交戦を目撃するという異様な瞬間を体験した。はるか40年も前のことである。半年間の空白の後、大学の機能が回復し本格的な勉学に復帰したとき、はじめて心理学という科目を聴講した。確か稲葉信龍教授の講義で、ペーパーバックのテキストを使用した記憶がある。残念ながら教授の講義内容はほとんど覚えていないが、その頃の心理学も科学的だったと思う。カリキュラムには津久井佐喜男教授の産業心理学の講義もあったように思うが、どういうわけか履修しなかった。それでも社会との接点を求めて矢島悦太郎教授の社会政策ゼミに所属したのは、今にして思えば応用的な思考力を培おうとする意図があったのかもしれない。

日本大学心理学科へ2度目の大学生に

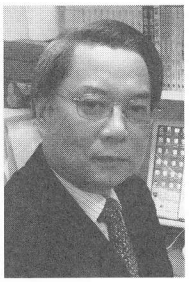
就職活動も一段落し卒業を控えたあたりから、社会へ巣立つことへの漠然とした不安と言うに言えない自信のなさに対する反動で、大学生としての自覚を再体験してみたい衝動に駆られた。しかし、とくにこれが自分らしいという目的を見出していたわけではない。以前より経済学の学習と並行して陰ながら心理学の書物に触れていた私は、何となく意味ありげな心理学という魔物を媒介にしてみようと考えた。ただ、もしかすると単なるモラトリアムの延長を望んでいたともいえる。あれこれしているうちに、今後の生き方を決断しなければならない時期が迫ってきた。自分のなかではそれなりに悩んだと思う。そこで、就職することを疑わなかった両親に深く頭を下げ、2度目の大学生に戻るべく伯父でもある共立女子大学の髙嶋正士教授に相談した。心理学の勉学をしたいがどうしたらよいだろうかとの問いかけに、伯父は快く応じてくれただけでなく編入学先の心配までしてくれた。そして最終的に日本大学心理学科の2年次に学士編入学することが決まった。

本格的に心理学を学ぶにあたって、吉田正昭（著）『心理学研究入門―心理学へのオリエンテーション―』（1963年初版、大日本図書）には心理学文献解説、研究の進め方、心理学の歴史、各国の研究状況などが詳述され、私に貴重な示唆を与えてくれた。このなかに日本の大学の特色を紹介したコーナーがあり、数行ではあるが所属する研究者と研究内容が記述されていた。

さて、日本大学心理学科とはどのようなところだろうかと図書館で書棚を散策していたとき、1968年に出版された波多野完治・藤永保（編）『心理学のすすめ』（筑摩書房）をめくるチャンスがあった。本書のなかの「大学・研究所の紹介」の項で、日本大学について「倫理学でなく心理学の角度から“人格”に手をつけた渡辺徹教授らによって基礎が作られ、長谷川貢、木村禎司らの教授による応用研究が多い」と紹介されていた。心理学の応用研究という耳慣れない言葉に関心を抱いたが、そのときはまだ何を指しているのかを理解できる知識がなかった。日大に通い始めたころ、「心理学は基礎研究の前に、すでに応用の研究と実践があった」という話を聞いていたがこちらも理解が不十分のままであった。同級生に比べて年上の私は、心理学概論をはじめ各領域の心理学科目や実験、演習、卒業論文の完成までを3年間で通過することになった。大学院への進学を希望し、運よく院生の1人になることができた。大学院ではすでに専任教授を退官されていた長谷川先生や木村先生、古賀行義先生など高名な諸先生の講義、演習を受ける機会に恵まれた。卒業論文は母性研究で著名な花沢成一教授の指導で「認知スタイル」をテーマにしたが、修士論文でも同テーマを継続し、

藤田主一

（日本応用心理学会副理事長／日本体育大学教授）



ふじた・しゅいち◉
1950年新潟県に生まれる。1982年、日本大学大学院文学研究科心理学専攻博士後期課程満期退学。城西大学経済学部講師、城西大学女子短期大学部助教授、同教授を経て、2005年日本体育大学教授。現在、日本応用心理学会副理事長。応用心理士、臨床心理士、学校心理士。応用心理士は1995年に第4号取得。専門は教育臨床心理学。

脳波研究で著名な山岡淳教授の指導を仰いだ。山岡教授とは湘南高校の先輩後輩（山岡教授は旧制中学）の関係にあったことが幸いした。共に「認知的熟慮性―衝動性」に関する研究で、児童を対象にMFFテストを用いた実験・調査をまとめたものである。

日本応用心理学会との出会い

大学院へ進学したとき学会に所属する機会を得た。日本心理学会、日本教育心理学会、日本応用心理学会の3学会で入会は1977年のことである。種々の学会のなかでも日本応用心理学会の設立は古く1936年に遡ること、戦後第1回大会が1946年3月に開催され主催校が日本大学であったことを後で知った。最初の学会デビューは共同研究で1978年だった。私自身のテーマによる発表は日心第43回大会（1979年）の「熟慮型―衝動型認知スタイルに関する基礎的研究」で、大村政男教授、山岡教授、花沢教授に連名の許しをいただいた。大村教授は博士後期課程での実質的な指導教授であるが、学部4年生必修「人格心理学」の講義を3年生のときから2年間最前列で聴講し嫌がられた懐かしい思い出がある。応心デビューは第47回大会（1980年）で、発表題目は「認知的熟慮性―衝動性児童の課題解決様式」というものであった。

初期の学会発表はどうみても応用心理学とかけ離れていたが、城西大学へ奉職したあたりから応用研究が加わるようになった。同大学の駒崎勉教授からの誘いもあり、城西歯科大学（現：明海大学歯学部）の歯科医師である西川博文教授らとともに歯科医療場面における患者心理の研究に着手した。歯科の患者は医科の患者と心理構造が異なる。それを研究する一環として「SCT-D（歯科用文章完成法）」なる検査を作成・標準化し、歯科患者特有の心理を描き出そうと試みた。治療前後に得られたデータに基づき、主治医や歯科衛生士との間でカンファレンスを開き、患者の理解とより良い治療のあり方を検討することで信頼性を高めた。幸いなことにある程度の評価を得ることができ、研究成果は歯学関係の学会発表や歯学専門雑誌への論文掲載につながった。歯科心理学は今後の発展が期待される領域だと思う。概略ではあるが『新 医療と看護のための心理学』（福村出版、2009年改訂版）所収に、小論「歯科医療の心理」が掲載されている。また、秘書学と心理学との学際研究プロジェクトに参画したことも有意義な体験であった。一方で応心での経験も増え、1994年には城西大学を会場に第61回大会を開催することになり、私は事務局長として大会会長の駒崎教授を支えた。大会発表論文集に大会記念集合写真を掲載したことも楽しい思い出であった。

その後、先の高嶋教授と共同で「人格の偉大性」研究に取り組んだり、東京富士大学の岡村一成教授や浮谷秀一教授と「EQの構成概念」を明らかにする研究に参加してきた。さらに、国士舘大学の中島豼教授や森脇保彦教授とは「柔道の応用心理学」研究にアプローチしている。他方、大村教授のライフワークといえる「血液型心理学」研究にも加わっている。応心会員の知恵の結集である日本応用心理学会編『応用心理学事典』（丸善、2007年）編集副委員長の職務は、今までにない喜びを感じた時間であった。

応用心理学の果たす役割の大きさ

城西大学で教育経験を重ねるにつれ、地域の教育委員会や幼稚園、小学校、中学校などの教育現場との接触が増えてきた。これは、2005年に日本体育大学へ異動してから現在までも継続している。教員や保護者、子どもたちが抱える悩みや問題に対して、応用心理学の立場から適切な対応を求められることが多い。日体大の長田一臣名誉教授と楠本恭久教授はスポーツ心理学であるが、教職課程を履修する学生が多いこともあり、私の担当授業は教育心理学や教育臨床心理学系の科目が中心である。社会に還元できる心理学の応用を実践する意味からも、応用心理学が果たす役割の大きさに新鮮な驚きを感じるものである。

海外最新事情

東アジアの発達障害研究の現状と課題

荒木穂積
（立命館大学産業社会学部
／同大学院応用人間科学研究科教授）

はじめに

2009年3月末に北京と上海を訪問し、4月からはベトナム・ハノイ師範大学で6ヵ月間の在外研究の機会をえた。また、この間8月にはオーストラリア・シドニーで開催されたアジア・太平洋自閉症会議（the Asia Pacific Autism Conference 2009：APAC 09）に参加する機会があった。これらの経験をもとにアジアとりわけ東アジア地域での発達障害研究の現状と課題について、自閉症研究に焦点をあてて見聞したことを交えながら紹介してみたい。

東アジアにおける発達障害の現状

先進国では、発達障害児の3大疾患は、以前は知的障害、脳性まひ、てんかんといわれてきた。しかし、ここ30年ほどの間に周生期・新生児期医学のめざましい発展によって脳性まひの発症率は著しい減少をとげてきているし、抗てんかん薬の開発や血中濃度測定技術の進歩によってててんかん治療はめざましい発展をとげてきている。これらと反比例するように発達障害の分野で増えてきているのは自閉症およびその近接領域の障害である。特に、自閉症スペクトラムの1990年代後半からの発症率の増大は世界的な傾向となっている。

図1はアメリカ・カリフォルニア州の1987年から2007年までの自閉症、脳性まひ（CP）、てんかん、知的障害（MR）の変遷過程をみたものであるが、1995年頃より急増していく様子がよくあらわれている。

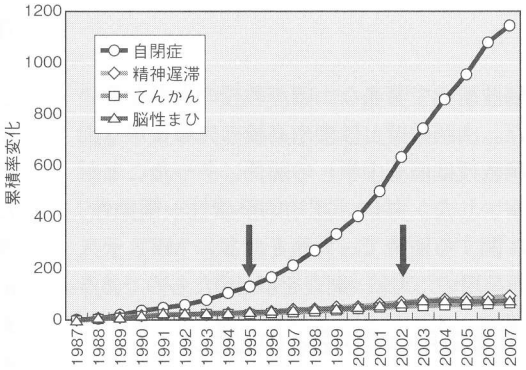


図1　自閉症・CP・てんかん・MRの20年間の発症率の変化（カリフォルニア・USA）

出典：Autistic Spectrum Disorder: Changes in the California Caseload An Update: June 1987- June 2007. This report is available at www.dds.ca.gov

では、東アジアの発展途上国であるベトナムや中国では発達障害児の現状はどうなっているのだろうか。

図2はベトナム国立小児病院リハビリテーション科を受診した子どもの受診実態をあらわしたものであるが、脳性まひの比率は50％で自閉症の比率はその5分の1の10％である。これは先のカリフォルニアの実態と比較してみると発症率でちょうど正反対の関係をなしている。すなわち、2002年で比較してみるとカリフォルニアでは脳性まひや知的障害と自閉症の比率は15倍以上開いているのに対して、ベトナムでは自閉症の比率は脳性まひや知的障害よりも低く、脳性まひの約5分の1、知的障害の2.5分の1である。先進国と発展途上国とでは、発達障害の疾患の種類やタイプは同じでもその発生率が異なることがよくわかる。

中国での自閉症研究

2009年4月2日の国際自閉症デーは北京で迎えた。中国社会科学院のホールで開催された障害児社会政策研究会主催のシンポジウムで「日本における自閉症児の医療・教育・福祉政策の現状と課題―パラダイム転換と新しい発達支援システムの構築―」と題して報告させていただく機会をえた。報告者の出身国は筆者の他にアメリカ、台湾、中国などであった。自閉症の教育・福祉に関係す

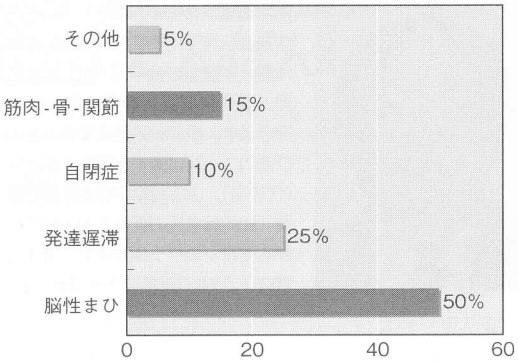


図2　自閉症・CP・MRの受診者比率（ハノイ・ベトナム）

出典：Tran Thi Thu Ha氏（ベトナム小児病院リハビリテーション科医師）による発表資料より（第1回東アジアの発達障害児のための治療教育プログラム開発に関するシンポジウム、2008年11月28日開催、於：京都）

る中国の非営利組織・非政府組織（NPO・NGO）の代表（多くは父母の組織が発展したもの）が全国各地から集まってきていた。参加者は約300名ほどであった。

自閉症の名称で、世界ではじめて症例報告がなされたのは、1943年アメリカの児童精神科医レオ・カナーによってであることはよく知られているが、日本でのそれは1952年名古屋の児童精神科医鷲見たえ子氏（現姓、中沢）で、アメリカに遅れること10年、今から50年余前のことである。

中国では、1982年に中国児童精神衛生センターの陶国泰が最初の4例の自閉症児を報告したのが自閉症研究の始まりであるとされている。また、自閉症の治療教育の歴史は、北京星星雨教育研究所の設立に始まるとされている。北京星星雨教育研究所は、自閉症児の親であった田恵平氏によって1993年に全国ではじめて自閉症児童とその家族に教育サービスを提供する民間の組織として設立された。北京星星雨教育研究所の創立のねらいは、1つには、自閉症児童たちに早期に個別化教育を受けさせること。2つには、自閉症児童たちの親とその家族に自閉症の知識を伝え、日常生活のなかで子どもたちの発達に良い知識と技術を獲得させること。3つには、自閉症障害、自閉症児童の理解と受容、自閉症児の生存と発達の権利の認めることに対する社会の認識を高めることであった（張・荒木、2006）。

北京星星雨教育研究所は、北京市の中心部からタクシーで40分ほど郊外に行ったところにある。筆者が訪問するのは2度目であったが、青年・成

写真1　北京星星雨教育研究所にて
（日本・中国・ベトナムの関係者、撮影：荒木）

人期のひとたちの宿泊施設（寮）が新しくできており、就学前から青年・成人期までの支援体制が整いつつあった。

中国では、ここ10年間のほどの間に都市部を中心に急速に障害児教育の制度的整備がすすみつつある。小学校、中学校に併設されている障害児学級は以前からあったが、知的障害児のための学校（中国名では、培智学校とよばれており、日本での養護学校または特別支援学校にあたる）が公立または私立で創設され始めている。また、私立の学校の多くは宿泊施設（寮）が併設されており遠くからでも通ってくることができるようになってきている。

ベトナムでの自閉症研究

ベトナムでの自閉症研究が本格的に取り組まれるようになってきたのはここ10年ほどである。筆者は、ここ10年の間に2回にわたってホーチミン市で障害児教育専門家養成の仕事に携わってきた経験がある。2008年8月からはハノイ市でJICA草の根技術協力プロジェクトとして障害児教育専門家養成に取り組んでいる。

最初の頃の受講生の1人が校長を務めるホーチミン市のダチェン障害児学校（現在は、ヤーディン障害児学校と改称）は知的障害をもつ子どもたちの学校であったが、1998年頃に自閉症の子どもが入学してきたというのでこの学校に発達診断にうかがったことがある。この学校では、自閉症の子どもを受け入れた最初のケースであった。

ベトナムで自閉症ということばを聞くようになったのはこの頃からであるが、医療や教育の分野の統計に自閉症の名前がみられるようになってきたのは、最近で、2005年頃からは保健省や教育訓練省（日本の文部省にあたる）などの文書にも

写真2　ハノイ師範大学障害児教育学部前にて
（JICA 障害児教育専門家養成プロジェクト参加学生とともに、撮影：荒木）

障害種別の1つとして自閉症がカテゴリー分類されるようになってきている。

ベトナムは発展途上国であり、電気・通信・交通網などインフラ整備が先進国の援助をうけて急速に進みつつある。インフラ整備と関わってとても不思議な光景を目にすることがある。ベトナムの農村地域や少数民族の住む山岳地域では、電気が最近になって敷設された地域が多く存在するが、その地域では村に電気が供給されるのとほぼ同時にテレビが各家庭に普及し始める。まだ電話線が引かれていないのに衛星放送用のアンテナが家屋に取り付けられているのを目にすることがある（発展途上国の多くは携帯電話の普及が著しく線が引かれるのはかなり遅れるようだ）。都市部ではパソコンの普及に伴ってインターネットから情報収集する人たちが多いが、農村部でも少し大きな村に行くとインターネットカフェがある。インターネットを利用しての情報収集は農村部でも可能で、情報リテラシーを獲得している人は、最新かつ最先端の情報にふれることができる。

自閉症に関する知識の取得の場合も同様である。自閉症ということばが聞かれるようになってまだ10年ほどであるが、最近では自閉症ということばと同時に学習障害やADHD（注意欠陥／多動性障害）、非定形広汎性発達障害（PDD-NOS）などのことばが関係者の間で話題になり始めている。ベトナムでは、まだ児童精神医学や小児神経医学の分野の専門医師は少ないが、上記の診断を受けて幼稚園や小学校に入学してくる子どもたちも現れだしている。イギリスやアメリカ、日本などでは、自閉症の症例報告から60年余の年月を経て今日にいたっているが、中国やベトナムではこの過程が短縮されて、ここ10年間、20年間の変化として現れてきている。あたかも電気の供給とテレビの普及が同時に起こっているかのようだ。なお、ベトナムでの、過去10年間の知的障害児教育の現状と課題に関しては黒田学（2006）の著書が参考になる。

荒木穂積（あらき・ほづみ）◉1978年京都大学大学院中退。現在は立命館大学産業社会学部／同大学院応用人間科学研究科教授。専門は発達心理学。東アジア発達障害児および親のニーズに関する国際共同研究（代表者）。JICA草の根技術協力事業「知的障害児の就学率向上につながる教育プログラム開発を支援するプロジェクト」（総括マネージャー）。

アジア・太平洋地域における自閉症ネットワークづくりの必要性

2009年8月20日から22日の3日間オーストラリアのシドニーでアジア・太平洋自閉症会議（APAC：Asia Pacific Autism Conference）の初会合が開催され、筆者もこれに参加した。これは自閉症関連のNGOや中央および政府組織、親の会、専門家などが集う地域会議で、1000名を超える参加者があった。地域会議として歴史があるのはヨーロッパ自閉症会議（Autism Europe）で、数年間隔（3年～4年）で開催され、2010年には第9回目を迎える。また、国際会議である国際自閉症会議（IMFAR：International Meeting for Autism Research）は、研究者や専門家が中心で、毎年開催され2010年で9回目を迎える。

第1回目のアジア・太平洋自閉症会議は開催地がオーストラリアであったことも関係してオーストラリアからの参加者がもっとも多かったが、中国、台湾、韓国、日本、ベトナム、シンガポールなど東アジア地域からの参加者も少なくなかった。ただし、東アジアからの報告はあまり多くなく研究の蓄積という点では、これからネットワークを構築しながら地域研究をすすめていく必要性を痛感させられた。

◉文献

- 張鋭・荒木穂積（2006）「中国における自閉症児の治療と教育の現状について」立命館人間科学研究、12、55-64
- 黒田学（2006）「ベトナムの障害者と発達保障―障害者と福祉・教育の実態調査を通じて―」文理閣.

心理学から見たおすすめDVD紹介

DVD『こんばんは』

◎2003年、日本、森康行監督作品、92分。◎2004年3月、第1回文化庁映画賞、文化記録映画大賞を受賞。

希望の学校

この映画は、東京都墨田区にある文花中学校の夜間学級を舞台としたドキュメンタリー作品です。文花中学は、山田洋次監督の『学校』のモデルともなりました。

生徒たちは17歳から91歳までの70人。戦中戦後の混乱や経済的な事情で学校に行けなかった高齢の人たち、登校困難の中学生や在日外国人の人たちです。映画には、そんな生徒たちが生き生きと学ぶ様子が丁寧に描かれています。「生きることの大切さ」「自分を信じる力」「友だちを大事にする尊さ」を学ぶ小さな教室。優しさと温かさに包まれた〈希望の学校〉がそこにありました。

森康行監督らスタッフは、「カメラが入ることが、学校にとっても、学ぶ人たちにとってもプラスになる映画を作りたい」と考えて、まず1年近く教室で同席して交流を重ね、理解と信頼を得て撮影を開始したそうです。心のはたらきの未知の魅力と不思議さとを探求している心理学の研究に、この映画はたくさんの貴重なヒントを与えてくれます。そして、心を耕す教育の原点を改めて教えてくれているように思いました。

どんな人になりたいですか？

映画では、2人の教師の授業の様子が紹介されます。

中村小十郎先生は、宮澤賢治の「雨ニモ負ケズ」の授業のなかで、詩の内容の解説や解釈だけではなく、生徒たちに、自分の生活経験とのつながりを意識させ、自分の生活を表現するよう援助します。さらには、作者賢治に成り代わって、自分だったらどんな人になりたいのかを考えさせ、それを詩として表現させ新しい自分をそこに結晶させていきます。そのなかで、中村先生が一人ひとりに問いかけます。「あなたは、どんな人になりたいですか？」

この言葉には、自分自身の将来を見通し、自分自身の未来に期待する力、そのような力を育むことが大事にされているように思いました。

見城慶和先生は、詩「菊の花」の授業のなかで、戦争に反対して投獄された主人公の田所冬吉が、どんな逆境にあっても「花のいのち、花のこころ」を忘れなかった、その気持ちを生徒たちに感じさせつつ、「みなさん自身が、田所ふゆこ、田所ふゆきちさんです。…この〈花の命、花の心〉とはどういう意味なのかを、自分の言葉で言ってください」と生徒たちに迫ります。

詩をとおして、自分自身を、そして自分の考えを自分自身の文章として表現させていく。そして、一人ひとりを大切にしたきめ細やかな言葉かけ。生徒たちの人格を徹底して尊重した指導方法、それらが生徒たちの「自己信頼性」（Self-Reliance）の力を培っていきます。映像にはそのプロセスが鮮やかに描き出されていました。

信頼と尊重と期待に包まれて

夜間中学では、登校困難を示す中学生たちも温かく迎え入れてきました。

伸ちゃんは、小学5年生のときから5年以上にわたって学校に行けなくなっていました。その上、両親以外とは誰ともしゃべれません。中学3年になってこの夜間中学に転校してきましたが、ひとことも声を発することができず、給食をみんなと一緒に食べることもできません。でも、ある日、国語の時間の作文に、たどたどしい文字で、「お母さん、いつも迷惑かけてごめんなさい」と書きます。この伸ちゃんの表情が、映画の最後の最後に、力強く、鮮やかに変わっていった数分間の映像は、人間の発達への限りない信頼と尊重と期待がいかに子どもたちの力を引き出すのかを描き出していたように感じられました。3月の卒業式では、夜間中学を卒業する生徒たちが、笑顔で異口同音に「卒業したくないです」と言っていたことがとても印象的でした。

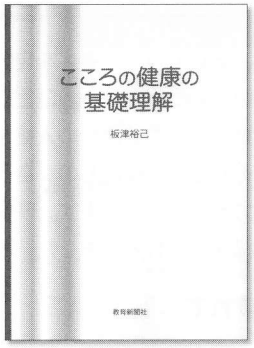
夜間中学は、真理・真実を求めて自らをよりよくしていきたいという人たちの声を受けとめ、徹底した人間尊重の立場にたって、大切な価値（その重要な1つとしての無償の教育）をすべての人たちに保障し、自他に共通する価値を認識し、共有し、尊重する力を生徒たちに獲得させ、自分自身と社会のよりよき未来をつくっていく力を与えていこうと日夜努力しているのではないか。そのように思いながら、私はこの映画を観ました。

この映画は、DVDの販売は終了しておりますが、全国各地の図書館等の公共施設で視聴できます。詳しくは、HP（http://konbanwa.web.infoseek.co.jp/）をご覧下さい。

田中真介　たなか・しんすけ◉京都大学高等教育研究開発推進センター准教授。保健管理センター非常勤講師（専任相談員）、大学院人間・環境学研究科共生人間学専攻を兼任。専攻は発達論・発達診断学・免疫学・神経科学。2010年日本応用心理学会第77回大会委員長。

『こころの健康の基礎理解』

板津裕己＝著



2007年9月発行
教育新聞社
本体価格1400円

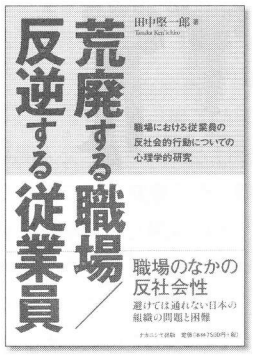
本書は、児童から高齢者にわたる精神保健上の問題と対応の方法を示すテキストである。特に教師の心の問題、障害児をふくむ学校場面における問題と課題への対応については、筆者のスクールカウンセラーとしての経験が具体的に反映されている。そこで健全な発達過程と生活環境は心理的健康をもたらすということが再確認されている。こころの健康について考えることは、人間の本来の姿、そして人間存在についてみつめていくための手がかりでもある。

筆者の板津裕己氏は、長らく自己受容のメカニズムについて研究をされている。本書も自己受容を精神保健の基礎と位置づけて、これを軸として構成されている。自己受容は、より全体的で選り好みをすることなく、広く自己の諸側面にわたって受け容れるという態度である。ご自身や他の研究者の自己受容研究の紹介をされていることで、概論書に終わることなく、独自性を表そうとしている。

［他薦］

林　潔◉白梅学園短期大学名誉教授。専門はカウンセリング心理学。

『荒廃する職場／反逆する従業員
—職場における従業員の反社会的行動についての心理学的研究』田中堅一郎＝著

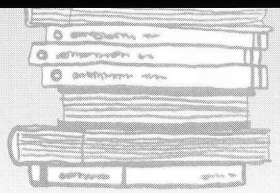


2008年10月発行
ナカニシヤ出版
本体価格7500円

企業における組織構成員によるさまざまな反社会的行動に着目して、組織において個人が反社会的行動を起こすに至るプロセスを明らかにし、上司や同僚から反社会的行動を受けた被害者の心身に生じる悪影響についても検討を加えたものである。日本においても、近年企業組織現場でのさまざまなハラスメント行為が問題になっているが、残念ながら心理学的研究の蓄積は少ないので、その意味で本書は希少価値があると思われる。本書は、過去の研究を展望した「概説編」、著者による研究をまとめた「実証編」から構成される。反社会的行動という組織のネガティブな側面に焦点を当てたため、データ収集にはさまざまな困難があったものの、なんとか実証研究を積み重ね、終章ではそれらの研究成果を踏まえ、反社会的行動を抑制・防止するための施策について心理学の立場から具体的な提言を試みた。

なお、本書は第11回日本社会心理学会出版賞、および第7回経営行動科学学会優秀研究賞を受賞した。

田中堅一郎◉日本大学総合社会情報研究科教授。専門は産業・組織心理学。



『図解雑学 見た目でわかる外見心理学』

齊藤　勇＝著

2008年11月発行
ナツメ社
本体価格1380円

『恋愛心理学』を校了したとき、その勢いで、次は「外見」はどうでしょう？　と編集者に打診したところ、「それはおもしろい、ぜひ！」と二つ返事で本書の出版が決まった。なにしろ、外見心理学というタイトルの本がまだ世になかったのが幸いした。

人は見かけによらぬもの、心が大事である。とはいいながらも、心はみえず、なんともこころもとない。他方、外見は、馬子にも衣装、実に明々白々である。芸も形から入る日本の伝統美はまさに、外見を重視する。外見のなかに心が宿るとする。

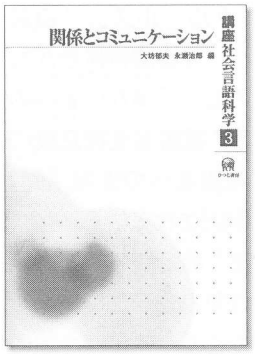
また、昔から、男性は美人が好きである。最近は女性もイケメンが好きといってはばからない。人は、その美形のなかに、ついつい美しい心をみてしまうからである。

外見と心理の関係は、対人・社会心理学に興味深い知見がたくさんある。本書はそれらの知見を図解し、わかりやすく紹介しようとの試みである。100を超す知見を楽しんでいただき、さらに、社会への応用を考えていただけたら幸いである。

齊藤　勇◉立正大学心理学部教授。専門は、対人・社会心理学。

『講座 社会言語科学3　関係とコミュニケーション』

大坊郁夫・永瀬治郎＝編



2009年1月発行
ひつじ書房
本体価格3200円

対人関係、対人コミュニケーションについての最近の研究動向や研究の視点を述べた1冊となっている。

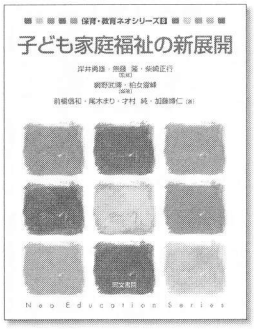
対人関係を維持、展開を主題とし、メッセージを伝え合うことに働く基本的な要因、研究の視点、対人関係を展開のための規則性について述べることから始め、ポライトネスと欺瞞、同調（シンクロニー）傾向、発言権の構造、対人関係の進展とコミュニケーションとの関連、文化行為としてのコミュニケーション行動を扱っている。社会心理学、社会言語科学、コミュニケーション学の研究動向・課題、今後の研究展開の方針を述べている。

なお、ポライトネスは、文化的要因と関連して対人関係を円滑にすること、欺瞞は記号化と解読の規則性を示すので、研究のさまざまなヒントが含まれている。同調傾向は、社会的モデリング、感情の伝染、同一性の獲得、共感性などから考察されている。会話時の発言権の交替は、社会的勢力、関係へのコミットメントを明らかにできるものである。

大坊郁夫◉大阪大学大学院人間科学研究科教授。専門は、対人コミュニケーション、社会的スキル。

『保育・教育ネオシリーズ〈6〉 子ども家庭福祉の新展開』

岸井勇雄・無藤 隆・柴崎正行＝監修　網野武博・柏女霊峰＝編著



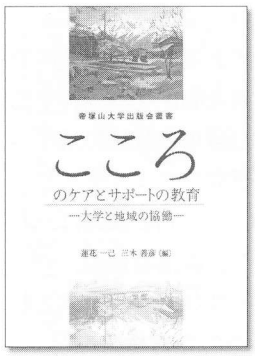
2009年3月発行
同文書院
本体価格2100円

編者の網野及び柏女は、いずれも心理学を専門分野として児童福祉に深くかかわってきた。本書は、わが国における児童福祉の大いなる転換期を迎えた近年、ウェルヘアとしての福祉とともにウェルビーイングの福祉が重視されている背景、動向そして具体的な展開をみせていること、そして児童福祉から子ども家庭福祉への新潮流の重要性について叙述した書である。この２人を編者として、各分野に造詣の深い他の４名の著者と共同で編み出した。特に、保育、教育に関わろうとする方々のテキストとして編纂された。一読していただくと、時代の波は児童虐待の予防と対応を典型とする子どもの権利擁護を一層すすめるための施策やケアワーク、ソーシャルワークの展開が求められていること、さらに少子社会における次世代育成支援にかかわる専門性をもとに、家族援助や家族再統合が求められていることを、理解していただけるだろう。

網野武博◉東京家政大学教授。専門は、児童福祉学、児童心理学、育児支援学。

『こころのケアとサポートの教育―大学と地域の協働』

蓮花一己・三木善彦＝編著



2009年6月発行
帝塚山大学出版会
本体価格3000円

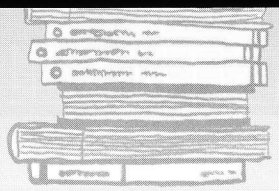
2006年から帝塚山大学で実施した現代GP「こころのケアとサポート教育の実践」での取組を解説した１冊である。

第１章「発達障害児と保護者へのグループワーク」では、軽度発達障害児とその保護者へのグループ活動を紹介した。また、教育関連の実践活動として、「生駒市小中学校での学習支援ボランティア活動」、「アドベンチャーカウンセリングの実践」、「交野市小学校における総合的心理教育の実践」を２章から４章で取り上げた。

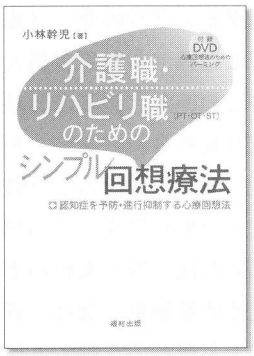
地域社会での支援活動として、「職場でのメンタルヘルス」、「自殺対策関連事業」、「児童虐待にかかわる専門家支援活動」、「障がい者への支援活動」、「DV被害者支援活動の実際」、「犯罪被害者への支援活動」が５章以降で解説されている。

取組全体のまとめと残された課題、さらに今後の展開の方向性を説明した最終章と合わせて、本書は今後の大学教育や現職の社会人教育に示唆を与える内容である。

蓮花一己◉帝塚山大学心理福祉学部、同大学院人文科学研究科教授。専門は、運転者行動、事故分析、交通教育。



『介護職・リハビリ職（PT・OT・ST）のためのシンプル回想療法
―認知症を予防・進行抑制する心療回想法』DVD付録　小林幹児＝著



2009年8月発行
福村出版
本体価格2800円

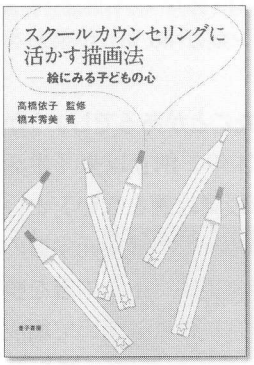
大きく分けて３分野（レクリエーション回想法・作業療法的回想法・心療回想法）に構成されている「回想療法」を各分野別にシンプルに解説しており、特に心療回想法については行動科学的理解に重点を置いている。たとえば、「笑い」を脳内伝達物質のオキシトシン系の笑い、セロトニン系の笑い、ドーパミン系の笑いと３種類に分けて解説し、そのなかでも心療回想法が目指すのはドーパミン系の笑いであり、そのためには個人の人生のなかで輝いていた時代を回想するのが最も効果的だと検証している。

付録DVD「心療回想法のためのパーミング」は、理学療法士がモデルにパーミングしている様子が映像化されている。

認知症短期集中リハビリテーション加算に適応する記憶の訓練に活用できるのでPO・OT・STが実施しやすくするためプランニング用紙・記録用紙などの記述事例見本で、すぐに実践できるように工夫されている。

小林幹児◉日本回想療法学会長。吉祥寺心療カウンセリングセンター所長。専門は、回想療法。

『スクールカウンセリングに活かす描画法―絵にみる子どもの心』
高橋依子＝監修　橋本秀美＝著



2009年10月発行
金子書房
本体価格2800円

描画法が子どもの心の理解や援助のために有効な心理技法の１つとして、スクールカウンセリングで広く活用されることを願いまとめた書となっている。本書は第Ⅰ部：描画法の基礎知識と第Ⅱ部：事例編とからなる。第１章では、主な描画法とその発展の経緯や描画法の基礎理論と解釈について、第２章では、人物画、家族画、動的家族画、動的学校画、バウムテスト（樹木画）、HTP法、K-HTP法など主な描画法の実施法について述べている。第３章では、スクールカウンセリングにおける描画法の適用について、心理テストと心理療法としての意義を中心に解説している。第Ⅱ部では、不登校、発達障害、思春期の問題など35事例をあげ、描画法の用い方を紹介している。Part 1ではアセスメントとしての使用、Part 2では心理療法としての使用を中心に解説し、絵のなかで留意したい点などを提示している。これらの実践事例は、筆者の長年の心理臨床活動の記録でもある。

橋本秀美◉追手門学院大学心理学部教授。博士（学校教育学）。専門は、臨床心理学、スクールカウンセリング、児童青年心理学、特別支援教育。

応用心理士として各方面で活躍する先生方に、
その活動を語っていただくコーナーです。

わが国における障害者武道の普及とその対策について

中島　豺

なかじま・たけし◉
国士舘大学武道徳育研究所長・教授。1968年国士舘大学体育学部体育学科を卒業、その後中学の教諭を経て、1971年単身海外に柔道漫遊の旅へ出る。1981年帰国と同時に母校国士舘大学武道徳育研究所に勤務。現在は、世田谷柔道会理事・日本武道学会理事・世界柔道科学研究者協会理事・社団法人障害者武道協会代表理事そして武道徳育研究所教授および所長が主な職務。

■障害者武道とはなにか？

私が日本応用心理学会に入会したのが2002年。学会発表後、心理士の認定証（第240号）をいただき、そんなときに私が所属している武道徳育研究所主催の「国士研究会」にこのようなテーマを企画いたしました。第4回国士研究会「障害者と武道」ではじめて障害者の武道を知りました。

■障害者に武道稽古ができるのか？

研究会が始まる前に大阪は枚方市にある社会福祉法人・わらしべ会、肢体不自由者更生施設・わらしべ園という施設（病院）を訪問し、医師でおられる村井正直博士およびスタッフにお目にかかりお話をうかがいました。そしてこれまでの病院の経緯と病院内にある常設の柔道場での稽古にも参加させていただきました（写真1）。

村井先生は、1966年イギリスはロンドンにてボバース法（Bobath cerebral paicy center）の講習会を受講しているうちに柔道の受け身の練習がK君という少年の歩行機能を疎通するのでは、という確信のようなものを感得したということから柔道による「柔道療育」を始められたということでした（村井医師は、北海道において乗馬による療育も実施されておられます）。

K君は、当時小学4年生で、通学は親の運転する自家用車で通っており、伸展パターンのとても強い子でしたが、健常児たちの盛んな刺激を一身に受けながら、徐々に身体運動を活性化に導き、練習を始めて2年後には、ランドセルを背負い自力で登校するようになりました。少年の傷病名は、脊髄脳性マヒで、生まれて今日まで十数年間寝たきりの少年でしたが、現在では自立し病院の近くに部屋を借り病院内での軽作業を行っています。

■障害者による武道稽古はよい効果を生むのか？

福祉の国北欧スウェーデンでの一例を報告いたします。スウェーデンの北、ノルボッテン県ルレア市にある、ルレア工科大学理学療法専門学科において、授業のカリキュラムに武道が取り入れられており、担当のポントス・ジョハンソン氏自らも下肢に傷害をもち車いすでの生活です。リハビリテーションとして水泳を取り入れパラリンピックの国を代表する選手になり、さらに水泳の競技力向上と精神力を鍛える目的で武道を取り入れ、稽古を通じてバランスの取り方を学び、16歳にして自立歩行ができるようになった次第です。道場には多くの障害者が通っております。（本人は、空手道2段・柔道1級）そして、世界で初めての「国際障害者武道連盟」（International Association Budo Culture for Disabled: ＡＢＣＤ）を設立し、その指導と啓発活動に努力されております（写真2）。

また、東京都世田谷区池尻にある、都立青鳥特別支援学校においては単元授業として10月から12月にかけ、生徒全員（約150名・うちダウン症が80％）が柔道を採用しております。

■こんな声を聞いたことがあるでしょうか？

この学校は1974年、創立以来「生活のなかで、こまぎれ授業は適さない」という授業への考え方があり、生活単元学習の名で、総合的に行われてきた学習内容を整理、分節化し、教科の系統性に基づいて編成し、教科別に指導しようという取り組みから1969年から体育の単元として「柔道」を取り入れ、当時の校長先生（CK氏）の談話として、柔道の授業によって生徒のケガが少なくなったということから現在においても実施している状況です。（写真3）

■これからの課題

柔道の創始者嘉納治五郎師範は道場訓に「柔道は心身の力を最も有効に使用する道である。その修行は攻撃防禦の練習に由って、身体、精神を鍛錬修養し、斯道の神髄を体得することである。そうして是に由って己を完成し、世を補益するのが柔道修行の究意の目的である」と述べています。また師範は、試合で勝利至上主義に向かう柔道を強く憂いて、身体鍛練で技を競うのは「下の柔道」、精神修養を含むのが「中の柔道」、さらに身心の力を最も有効に使って世を補益するのが「上の柔道」と論じました（嘉納、1918）。

私も学生時代は勝敗を目的に練習を重ね、卒業後は指導に、今やっと、本当の柔道に携わったのではないかと考えております。

これからは、日本応用心理学会「応用心理士」としての立場からいろいろなタイプの障害をもつ人々のお役に立ち、障害という言葉が普通に使われる日が来ることを期待します。

◉文献

嘉納治五郎「有効の活動」講道館（1918）

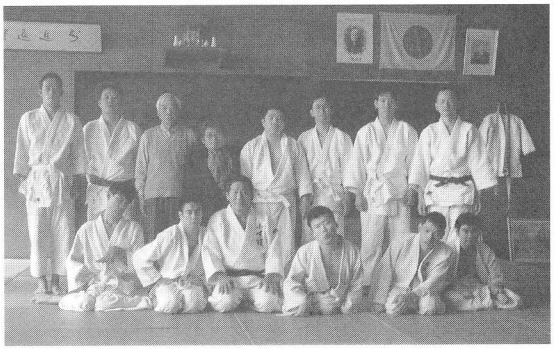


写真1　わらしべ園（2004年1月）

写真2　スウェーデン（2008年2月）

写真3　青鳥特別支援学校（2008年7月）

写真4　フランスでの視覚障害者柔道大会（2008年6月）

さまざまな心理対応方法を研究・実践

柳澤淳子

やなぎさわ・あつこ
◉1968年日本大学文理学部心理学科卒業後サポート校カウンセラーを経て、越谷市立看護専門学校カウンセラー講師、社会保険中央看護専門学校のカウンセラー、特定非営利活動法人APL・パラカウンセリング研究所の理事長。共依存・アサーティブ・再評価カウンセリング・グリーフワーク等の心理セラピーを学習し、自殺防止や発達障害にも関与し抑鬱・死などに関してのトレーニングも受けている。

■カウンセラーの育成

NPO法人APL・パラカウンセリング研究所（2005年に改名）は2001年に設立し、Aをアビューズ（虐待）Pをサイコロジカル（心理学的な）Lをラボラトリー（研究機関）と意味づけし、Aの意味を広げDV・非行・燃え尽き・引きこもり・不登校、またターミナルケアや介護分野、軽度発達障害などすべてにかかわるものがAの分野だと解釈し、さまざまな心理対応方法を研究・実践している研究所である。

その実践の為にはそれを支えるカウンセラーが必要であり、現在はそのカウンセラーの育成を主に行っているNPO法人である。

2000年3月に応用心理士の資格を受け、同5月には読売新聞のメールかわら版にカウンセリング教室をスタートして載り、300名近い研修申込者があった。1年半かけてカウンセリング研修を行い2001年の4月NPO法人立ち上げとほぼ同時期、読売新聞にNPO法人短信として載りこの時も200名以上の研修申込者があった。その他全国経営者団体連合会の雑誌スクエア他各種雑誌・他新聞にも取り上げられ、社団法人日本青少年育成協会の不登校・引きこもりのサバイバー児に対するカウンセリング研修も依頼された。以後4年間引きこもり児やその父母などへの研修（毎回80～100名）を行うこととなった。また知的障害者親の会へのかかわりやカウンセラー研修習得者を老人ホームへ派遣することも開始した。2003年・2004年は足立区と、2005年には台東区からの要請でヘルパー、ケアマネージャーへのスキルアップとしてのカウンセリング研修を行い、越谷市立看護専門学校からカウンセラー講師として要請があり閉校まで勤め、2005年に社会保険中央看護専門学校にカウンセラーとして勤め現在に至っている。

その他小学校や大学、商工会議所、区のワークショップや各種サポート校・各種勉強会への講演・講習、千葉大学であけぼの会の女性会員へターミナルケアの研修等から、方向が障害児とその父母や介護現場の介助者への対応に向かい、介助・介護する側の辛さ、切なさ、悲しさを知ることで「介助・介護する者が希望を失い、疲れ切ることがないように」という名目で2008年独立行政法人福祉医療機構「長寿・子育て・障害者基金」の助成事業を受け千葉・東京と100名に研修を行い、その流れが現在も繋がり研修が続いている。

■新しい課題をみつけて

今日まで研修をずっと続けてきた結果1つの課題がみえてきた。それは対人関係ができず自分探しをしていてカウンセリング研修を学びに来る数多い成人のほとんどに、軽度発達障害の傾向が多々あるということである。しかし具体的な証明ができないこと、本人または親自身がそのことをなかなか信用しないこともあり遠まわしな提示しかできない。

また当研修者の多数が女性であることが多く、女性には母性があるため女性自体の軽度発達障害的傾向が目立たないのだが多々存在していること、そして子を成し母となった時、その母自身が軽度発達障害等々の傾向があることで、人の心が読めないために子に引きこもりや虐待、夫や身内や他者との衝突があるのだということが研修を重ねるごとに証明されており、それは本人自身がそのことに気付き修正しない限りは改善しないものなのだが、それを如何にしたら世に伝えられるかということである。

現在当研究所はその解決に向かっての研究を続けている。

日本応用心理学会認定「応用心理士」資格認定申請のご案内

本学会では1995年から、一定の業績を持ち、応用心理学の専門職として資質があると認められた会員に対し、「応用心理士」の資格を認定する事業を行っており、現在まで290名（2010年3月現在）の会員に認定してきました。この資格は、応用心理学領域の専門職に従事している会員の社会的地位を承認するために制定されたものです。これを所持することによって、多くの人々の承認を受け、業務に専念できるとともに、活躍する場を拡大することを狙っております。

「応用心理士」の資格は、日本応用心理学会の会員である間は有効で、履歴書等にその所持を記載することができます。専門職資格が今後ますます重要視されるなかで、ぜひお取りいただくようお勧めします。

会員の皆様で、資格要件を有しながら、まだ「応用心理士」の資格を取得されていない方は、どうぞこの機会に申請手続きをお取り下さいますよう、改めてお願い申し上げます。なお、申請時に必要な書類は資格認定申請書、履歴書、業績書となります。今年度後期の受付期間は12月末日までです。

また、認定「応用心理士」の普及を図るため、お知り合いの会員の中で「応用心理士」としてふさわしい方がございましたら、資格取得をお勧めいただきたくお願い申し上げます。

以上、資格要件や申請手続きの詳細に関しまして不明なことがございましたら、「応用心理士」事務局までお問い合わせ下さい。メールアドレスは、ukiya@fuji.email.ne.jp です。

会員の皆様のご健康とご活躍を心よりお祈り申し上げます。

2010年5月

日本応用心理学会
理事長　森下　高治
「応用心理士」認定審査委員会
委員長　玉井　　寛

信州大学◎内藤哲雄

2011年第78回大会開催校・研究室紹介

2011年の第78回大会は、信州大学人文学部（松本市）で開催させていただくことになりました。信州大学での大会開催は、半世紀近く前の1963年第30回大会（大会委員長人文学部中川大倫）以来の2回目となります。開催時期は9月を予定しております。松本への公共交通機関としては、JR、高速バス、航空機（松本空港）などがあります。開催地松本は山岳観光の基地として知られており、松本キャンパスの標高は650メートルです。大学のすぐ近くに浅間温泉をはじめとする美ヶ原温泉郷があり、ホテルや旅館が数多くあります。市町村合併で、乗鞍岳や上高地も松本市となり、ドラマに登場することの多い山岳救助隊も豊科警察署から松本警察署に移りました。長野県は観光名所に恵まれており、日本酒とワインの産地としても知られています。観光・保養の適地です。研究発表だけでなく、自主シンポジウムやワークショップを多くして、研究者や実務家の交流の場としたいと考えています。本大会への皆さま多数の参加をお待ちしております。

信州大学では、1年次（医学部は2年次まで）は全学部学生が松本キャンパスでの共通教育を受講します。学部・大学院の専門課程は県内隔地のキャンパスに分散しており、長野市（松本からJRを利用した場合［以下同様］65キロ）に教育学部と工学部、上田市（80キロ）に繊維学部、南箕輪村（50キロ）に農学部があります。

本部事務局のある松本キャンパスには、人文学部のほか、経済学部、理学部、医学部、共通教育の全学教育機構があります。人文学部での心理学系教員は、心理学分野に今井章教授（実験心理学、心理生理学）、高瀬弘樹准教授（認知心理学）、社会心理学分野に内藤哲雄教授（実験社会心理学）、長谷川孝治准教授（対人社会心理学）、清水健司准教授（臨床心理学）、文化情報論分野に菊池聡准教授（認知心理学）がいます。また、社会学分野の辻竜平准教授（社会ネットワーク分析）は、前任校では社会心理学を担当。心理学系の各分野は実習や講義の授業科目を補完し合う形で、緩やかに連携しています。国立大学の人文学部としては、心理学系の教員に恵まれているほうだといえるでしょう。学部学生数は教員1人あたり各学年5名前後で、少人数教育です。また、人文学部と同じキャンパスに全学部の共通教育を担当する全学教育機構があり、同一キャンパスに4学部があることで学生数が多く、実験や調査を実施しやすいといえます。学部生の出身地が北海道から九州・沖縄まで広がっていることもあり、大学院への進学希望者は、本学の人文科学研究科、教育学研究科だけでなく、全国の国公私立大学の大学院に進学しています。

松本キャンパスの他部局での心理学系教員には、全学教育機構に湯田彰夫教授（社会心理学）、医学部保健学科に玉井真理子准教授（心理学、生命倫理学）がいます。なお、医学部保健学科には、本学会会員の看護教員阪口しげ子教授（小児看護学）がいます。

国際交流委員会委員長◎内藤哲雄

第27回国際応用心理学会大会（メルボルン）のお知らせ

第27回国際応用心理学会大会は、国際応用心理学会とオーストラリア心理学会の共催で、2010年7月11～16日に、オーストラリアの〈メルボルン会議・展示センター〉で開催されます（http://www.icap2010.com/）。

発表形式は、従来と同じ「シンポジウム（Symposia）」、「パネル・ディスカッション（Panel Discussions）」、「論文付き個人口頭発表（Individual Oral Paper Presentations）」に加えて、2010年の新形式である、口頭発表と下記の電子ポスター発表の両方の要素を持つ「簡易口頭発表（Brief Oral Presentations）」、ロビーのパソコンからポスター論文にアクセスして、著者にEメールで質問したり、指定の場所で質疑応答できるシステムの「電子ポスター発表（Electronic Posters）」となります。日本応用心理学会企画のシンポジウム（Measures to Aging in Japan）は、大会4日目7月14日の午前8時30分から10時に開催されます。

■現地事情

メルボルンは治安が良く美しい街ですが、大会開催中の7月は冬であり、大会HPによれば、平均気温は最低が6℃で、最高が13℃。朝夕はコートが必要だとのことです（筆者注：小さくたためるダウンなどが便利でしょう）。また、小さめの折りたたみ傘を持参した方が良いでしょう。

オーストラリア入国には、パスポートのほかに1年間有効の電子ビザの申請が必要です（旅行業者に有料で依頼可能）。成田からメルボルンまでの直通便はなく、乗り換えを含めての所要時間は、12～13時間です。車は日本と同じく左側通行。なお、オーストラリアではチップは不要。空港から市内中心部へのタクシー料金は、40～50オーストラリアドル（A$）となります。

大会会場は市街地にあり、Googleの地図などで簡単に確認できます。食事や観光を含めての市内での移動にはトラムが便利です。車内の発券機での切符の購入は、コインのみ。ゾーンが〈1〉と〈1+2〉の2通りで、2時間券と1日券があります。切符を購入して最初の乗車や乗り換える時には機械に通してヴァリディティを得ること。主要駅以外では切符の確認がなく、駅から離れても切符を呈示させる「捜査権」や「逮捕権」をもつ係員も通常では車内に乗っていませんが、停留所に係員4～5人が待っていて一斉に検札することがあります。現地に住む知人から聞いた情報ですが、たとえ小銭がなくて買えないときでも、切符をもっていないと100ドルくらいの罰金になるとのこと。トラム利用には、乗車前にコインを確保しておくことが必要です。

■応用心理学研究英文特集号への投稿について

第27回国際応用心理学会大会で口頭やポスター等で発表した会員は、応用心理学研究の英文特集号に投稿できます。英文特集号の投稿論文は原著、資料、短報です。審査と編集は国際交流委員会が担当します。英文特集号の投稿受付と審査開始は2010年の第77回日本応用心理学会大会の終了後であり、内藤委員長が第78回大会準備委員長となるので、機関誌「応用心理学研究」編集委員及び委員長代行経験者である田中真介氏を副委員長とし、また2010年3月に退任した所正文氏と交代して機関誌新編集長の川本利恵子氏が加わることが、常任理事会で了承されました。

なお、英文特集号の投稿要件や審査掲載手順・日程については、本委員会での検討を経て、ホームページ等で公示することになりました。投稿を予定されている方は、第77回大会（京都大学）での総会での報告や大会終了後に掲載予定のホームページによって確認してください。

編集委員◎田中真介

機関誌編集委員会からのお知らせ

■編集委員会の新体制

2009年4月より、森下高治新理事長の就任を受けて新たな常任理事会が発足し、機関誌編集委員会も、所正文委員長のもとで新しい体制でスタートしました。

その後、機関誌編集委員会では、所正文委員長の体調不良のため、2010年1月1日から3月31日のあいだ田中真介委員が委員長代行として編集長業務を担当しました。田中委員は本年9月に開催される77回大会の大会委員長であるため、2010年4月1日からは、田中委員からさらに川本利恵子先生に委員長をバトンタッチし、また、深澤伸幸先生を副編集委員長として、新たな体制で編集業務をすすめています。

さらに、編集業務をより円滑にするために、新たに深澤伸幸先生の研究室（東京富士大学）に「編集事務局」を設置することが常任理事会で了承され、そこで一括して投稿論文を受け付けることになりました。また、編集事務局には補佐役をおくことも了承されました。

編集委員会の各部門では、これまでと同様にそれぞれ2名の責任委員を中心として査読の手配と編集業務を進めています。また、論文投稿と編集については、藤田主一副理事長（一昨年度までの編集委員長）が、総合的なアドバイザーとして編集委員と査読者および論文投稿者からの相談に幅広く対応しています。

●2010年4月1日～2012年3月31日までの編集委員会・編集事務局体制

委員長：川本利恵子（九州大学）

副委員長（編集事務局）：深澤伸幸（東京富士大学）

編集委員：12名

●2010年4月1日以後の投稿論文の送付先

以下の「編集事務局」が新たな送付先となります。

〒169-0075　東京都新宿区高田馬場3-8-1

東京富士大学　深澤伸幸研究室気付

「日本応用心理学会機関誌編集委員会」あて

●年間スケジュール

＊機関誌「応用心理学研究」は、年間2号（秋期と春期）を発行しています。

＊投稿論文は、上記の編集事務局で常時受け付けています。

＊4月末ころまでに投稿された場合には9月（秋期）発行号、10月末までに投稿された場合には翌年3月（春期）発行号に向けて査読が行われます。

■審査の手順（概要）

（手順1）編集事務局および部門責任委員による査読の手配

1）編集事務局は、投稿論文を受稿したのち、投稿者に「投稿論文受領通知」を送る。次いで、編集委員長と協議してただちに研究分野を識別し、各部門責任者に査読の手配を依頼する。その際、3部を部門責任者に郵送する（うち1部は氏名・所属の記載あり、2部は記載なし）。1部（氏名等の記載あり）を編集事務局で保管する。

2）各部門責任者は適切な査読者2名を選定し、査読を依頼する（短報論文と実践報告は主として部門責任者と副責任者で審査）。

3）部門責任者は、2名の査読者のうち1名が不採択の判断を下したときには、第3の査読者を立てて査読を継続する。大まかな審査期間は次のとおりです。

①編集事務局で投稿論文の受付（受稿）→分野の識別と部門責任者への配送：約1週間。

②部門責任者で査読の手配ののち、

1回目の審査期間：約5週間（査読者）

1回目の修正期間：約3週間（投稿者）

2回目以降の審査期間：約3週間（査読者）

2回目以降の修正期間：1～2週間を目安とする（投稿者）

4）部門責任者は、査読が完了した時点で、論文投稿者に対して「採択通知」ないし「不採択通知」を送る（掲載予定の巻・号の通知は、編集委員会での確認後となります）。

＊「採択通知」を送るときに、最終原稿に加えてそれを収納したコンパクトディスク（CD-R）などの電子媒体でファイルの提出を求める。

5）部門責任者は、最終原稿を受領したのち、編集

委員長および編集事務局に審査完了報告を行う。その際に、投稿者から送付された最終原稿と電子媒体でのファイルを編集事務局に郵送する。

（手順２）編集委員会での最終確認と印刷・校正

1）8月と2月の常任理事会の前に、編集委員会（編集委員長と正・副責任者）を開催し、直近号に掲載する論文リストを確認する。

2）審査が完了し次号への掲載が確定した論文投稿者（著者）に対して、編集事務局は、編集委員長名で、○巻○号に掲載予定であることを通知する。

3）編集事務局は、印刷業者（（株）国際文献印刷）に原稿一式を送付する。

＊編集委員長と編集事務局で機関誌全体の編集作業を進める。

＊編集事務局は、印刷業者から初校を受け取り、各著者に転送する。著者は、校正を加えたペーパーを1週間程度で編集事務局に返送する（著者校正は初校のみ）。

■参考文献・資料

＊学問分野としての応用心理学の特色と将来構想、また具体的な研究の進め方と論文投稿のしかた等については、本学会からこれまで次のような文献・資料を提起してきました。ご参照ください。

(1)「応用心理学研究」：各巻末に投稿・執筆規程を掲載。

(2) 学会ホームページ：①公式版、②改訂検討版。

①学会公式 HP：http://wwwsoc.nii.ac.jp/jaap/（応用心理学会事務局）

②改訂検討 HP：http://www7b.biglobe.ne.jp/~dev-okinawa/jaap/top.html

(3) 応用心理学への提言と論文作成・投稿の指針：

1）田中昌人（代表）日本応用心理学会（編）「日本応用心理学会史―学会活動の変遷回顧と展望―」応用心理学研究別冊，1998.（＊pp.214-239に、秋葉英則、足立浩平、稲毛教子、伊吹山太郎、内海滉、大久保康彦、太田垣瑞一郎、大塚博保、大村政男、奥沢良雄、恩田彰、垣本由紀子、金子秀彬、亀井一綱、北村晴朗、黒田正典、斎藤幸一郎、佐藤啓子、高嶋正士、高橋たまき、高橋哲也、田中熊次郎、田中昌人、田之内厚三、塚田毅、手塚太郎、中川大倫、長塚康弘、橋本泰子、馬場房子、林潔、平野馨、福原眞知子、藤田主一、正田亘、松浦常夫、宮本美沙子、森重敏、森下高治、蓮花一己の各氏の提言を収録）

2）村井健祐（企画・司会）、稲毛教子・小野浩一・深澤伸幸・鈴木祐子（話題提供）「日本応用心理学会の歴史と将来への期待―学会史発行を記念して―」日本応用心理学会第65回大会（龍谷大学）発表論文集、pp.21-25, 1999.

3）田中昌人「平和・安全・発達保障の応用心理学を目指して―2050年迄の応用心理学の前提と課題に関するミレニアム考―」応用心理学研究，27-2, pp.1-16, 2001.

4）坂野登「応用心理学研究の方法と対象」応用心理学研究，28-1, pp.1-16, 2002.

5）稲毛教子、秋山俊夫、坂野登「名誉会員からのメッセージ」JAAP 日本応用心理学会ニュースレター，10, 2004.（＊稲毛教子「日本応用心理学会と私」、秋山俊夫「応用心理学会と私」、坂野登「日本応用心理学会への期待」の各論稿を収録）。

6）藤田主一（企画）、浮谷秀一（司会）、大村政男・荻野七重・田中真介（話題提供）、内藤哲雄・大坊郁夫（指定討論）「日本応用心理学会の過去・現在・未来を語る」日本応用心理学会第74回大会（帝塚山大学）発表論文集、p.8, 2007.

7）機関誌編集委員会「特集　応用心理学と応用心理学会はどうあるべきか」応用心理学研究，33-2, pp.163-174, 2008.（＊大村政男「応心、もっと考えませんか？」、荻野七重「応用心理学の現在―応用心理学会の弱点を利点に―」、田中真介「情熱の行方」、大坊郁夫「長い歴史と多様な領域を未来に活かす」、内藤哲雄「現象・現場と対峙する」、垣本由紀子「心理学の応用はいかにあるべきか」、細江達郎「心理学のさらなる応用を期待して」、林潔「応用心理学への期待」の各論稿を収録）。

8）谷口泰富ほか『「応用心理学研究」への論文投稿のための研修セミナー』（日本応用心理学会第76回大会の記録）、応用心理学研究，35-1, pp.29-39, 2009.（＊谷口泰富「企画趣旨」、藤田主一「論文の投稿と倫理について」、所正文「論文のまとめ方」、田中真介「実践研究論文の特徴」、大坊郁夫「論文審査のポイント」、井上孝代「臨床研究の観点からの示唆」の各論稿を収録）。

日本応用心理学会の入会申込書を次にご案内しますので、入会を希望する方はお申し込み下さい。
このページをコピーし必要事項を記入して、下記事務局宛までご郵送下さい。

日本応用心理学会入会申込書（正会員用）

申込年月日（20　　年　　月　　日）

フリガナ		推薦者（正会員） ㊞	
氏　名			
ローマ字		性　別	男　　女
		生年月日	19　　年　　月　　日
現住所	〒		
	電話番号	（　　）	
最終学歴	［　　年　　月］【在学中のものではなく、卒業あるいは中退・修了したもの】		
所　属	名　称		
	所在地	〒　　電話番号　　（　　）	
	職名・身分		
研究領域			
メールアドレス			
備　考			

◉記入上の注意

1. 楷書で正確に記入して下さい。
2. 正会員の入会資格は、会則第4条第2項に次のように定められています。
   (1) 4年制以上の大学で心理学およびその隣接分野を専攻した者
   (2) 第1号に準じる者
      (1) の隣接分野とは以下の分野を指しています。
      教育学、児童学、人間関係学、体育学、社会学、社会福祉学、芸術学、宗教学、医学（心身医学、精神医学、行動医学など）、看護学、経営学、認知科学（人工頭脳など）、人間工学、など。

   (1) の入会資格に該当しないと判断される場合は、備考欄に高等学校卒業後の学歴および職歴をできるだけ詳しく書いてください。(2) の第1号に準じる者と認めることができるかを判断する資料とします。記入欄が不足したときは別紙に書いて添付してください。
3. 社会人学生の場合には、在学大学（大学院）名等詳細を備考欄に記入してください。
4. 推薦者には、必ず、署名のうえ捺印してもらってください。
5. 推薦者がいないなどの相談がある場合は、学会事務局にご連絡ください。

日本応用心理学会事務局：〒169-0075　東京都新宿区高田馬場4-4-19　㈱国際文献印刷社内
電話：03-5389-6491　FAX：03-3368-2822　E-mail：jaap-post@bunken.co.jp

事務局受付〔　　〕　審査〔　　〕　本人連絡〔　　〕　会費納入〔　　〕

原稿募集

『応用心理学のクロスロード』では、皆様の原稿を募集してます（執筆者の紹介・推薦も受け付けてます）。

募集コーナー

①「ホープ登場　クロスロードの星」

対　　象　応用心理学を研究中の大学院生
原稿字数　3000字以内（写真、図表を含む）
内　　容　自己紹介、活動や研究、応用心理学会についてなど、自由原稿

②「大学探訪　研究室におじゃましました」

原稿字数　4800字以内（写真、図表を含む）
内　　容　大学・研究室の紹介など自由にアピール

③「職場探訪」

原稿字数　4800字以内（写真、図表を含む）
内　　容　職場や研究所の紹介、自由原稿

④「CROSSROAD ESSAY」

原稿字数　3000字以内（写真、図表を含む）
内　　容　「私と応用心理学」というテーマの自由原稿

⑤「海外最新事情」

原稿字数　4800字以内（写真、図表を含む）
内　　容　応用心理学における海外の最新事情（情報）や留学の体験談など、自由原稿

⑥「心理学から見たおすすめのDVD紹介」

原稿字数　1300字以内（写真、図表を含む）
内　　容　作品について心理学の観点から解説、鑑賞のポイントなど、自由原稿

⑦「BOOK REVIEW　本を出しました」

対　　象　2009年7月～2010年7月の間に刊行分の会員の書籍
原稿字数　430字以内
内　　容　本の紹介（自薦・他薦は問いません）

⑧「応用心理士の現場」

原稿字数　4500字以内（写真、図表を含む）
内　　容　応用心理士の活動（現場）の紹介、応用心理士の社会的貢献など、自由原稿

⑨「その他」

本誌の感想・意見、日本応用心理学会へのメッセージなど

2号の原稿締切　2010年8月31日

（※3号以降に掲載させていただく場合もあります）

応募方法

原稿は、連絡先（住所、電話、メールアドレス、所属）を必ず明記して、お送り下さい。デジタルデータの場合はメール添付ファイルにてお送り下さい。掲載の採否については広報委員会で決定させていただきます。なお、お送りいただいた原稿は返却いたしません。予めご了承下さい。

送り先

［郵送］
〒240-8501
横浜市保土ヶ谷区常盤台79-4
横浜国立大学　藤森研究室気付
日本応用心理学会
「応用心理学のクロスロード」原稿募集係

［E-mail］　fujimori@ynu.ac.jp
件名に「応用心理学のクロスロード」原稿応募とお書き下さい。

広報委員会（五十音順）

委員長　藤森立男　横浜国立大学

委　員　内山伊知郎　同志社大学

加藤博己　駒澤大学

田中真介　京都大学

蜂屋　真　流通科学大学

星　薫　放送大学

編集後記

「応用心理学のクロスロード」創刊号をお届け致します。

本広報誌は、2009年4月から日本応用心理学会の新役員体制がスタートし、理事長に森下高治先生、副理事長に藤田主一先生がご就任され、両先生から新広報誌の制作を要請されたことが契機となっています。目的は本会の研究・実践活動や広報活動をさらに活発にすることです。その後、常任理事会において方向性や内容を検討し、2009年9月に九州大学で開催された第76回大会（川本利恵子大会委員長）の総会において新広報誌の概要を報告し、広報委員会が構成内容を具体化しました。

本会は、日本心理学会に次いで伝統のある学会です。しかし、本会の団体名は日本社会に必ずしも広く普及していないのが現状です。また、本会は日本社会の諸問題を解決するための方策を積極的に提言しておらず、情報発信力に欠けるのではないかという意見も寄せられています。

そこで、本会に活力を取り戻し、未来思考的でエネルギッシュな学会にするための方策を検討してみました。そのひとつの答えが「応用心理学のクロスロード」です。クロスロード(crossroads)とは交差点、十字路という意味です。本会は多様な考えをもつ先生方の集まりですので、さまざまな意見が存在します。そこで、気軽に対話でき、相互理解を深めるための広場が必要であると考えました。異なる意見をもつ人々がかかわる広場です。クロスロードという情報交換の広場を通じて、著名な先生の隠されていた別の顔が明らかになるかも知れませんし、若い研究者たちの素晴らしいアイディアや才能を発見することにつながるかも知れません。人生経験に裏打ちされた智慧や新しい感性などを大切にする広場です。

本広報誌がさまざまな人々の出会いと発見の広場として有意義に活用され、日本応用心理学会が未来思考的で活力のある学会になりますことを心から祈念致しております。皆様の積極的なご参加とご協力のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

応用心理学のクロスロード　Vol.1

（年2回発行）

編集・発行　日本応用心理学会
〒169-0075
東京都新宿区高田馬場4-4-19
TEL　03-5389-6491
FAX　03-3368-2822
E-mail　jaap-post @ bunken.co.jp
HP　http://wwwsoc.nii.ac.jp/jaap/

編集協力・製作　福村出版株式会社

デザイン　有限会社 臼井デザイン事務所

印刷・製本　モリモト印刷株式会社

2010年6月1日　発行

◆福村出版の本◆　◎＝本体価格

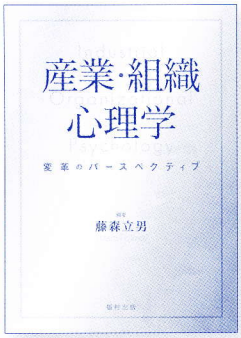
産業・組織心理学

——変革のパースペクティブ——

藤森立男 編著　◎2,400円

ISBN978-4-571-25037-8　A5判／並製／272頁

個々人が働く意識を高めた高学歴社会では、旧来の企業運営は通用しない。今の時代に求められる柔軟な組織論を最新研究より紹介、個人と組織の関わり方を各方面より論じる。



第Ⅰ部　ヒューマン・マネジメント
第１章　ワークモチベーション：仕事への動機づけ
第２章　職場のコミュニケーション
第３章　変革のリーダーシップ
第４章　職場の対人関係
第５章　ストレスとメンタルヘルス
第Ⅱ部　パフォーマンスと評価マネジメント
第６章　経営の意思決定
第７章　採用面接と人事評価
第８章　人的資源管理とキャリア開発
第９章　職務満足と組織の活性化
第Ⅲ部　企業環境マネジメント
第10章　組織変革の戦略
第11章　広告戦略
第12章　マーケティング戦略
第13章　ITビジネス戦略
第14章　危機管理の戦略

仕事とライフ・スタイルの心理学
NIP研究会／森下高治ほか 著　◎2,800円　ISBN978-4-571-25035-4
現代社会で人はどのように仕事とかかわっていけばよいのか？　様々な問題を心理学的見地から検討する。

現代社会の産業心理学
向井希宏・蓮花一己 編著　◎2,800円　ISBN978-4-571-25030-9
作業環境、インターフェイス、エラーと事故、リスク、消費者行動などに焦点をあてて、最新の知見を紹介。

産業・組織心理学入門〔第２版〕
岡村一成 編著　◎2,400円　ISBN978-4-571-25013-2
会社集団の中の人間関係、人材育成、モチベーション、ストレスから消費者行動・企業福祉までを心理学的に解説。

消費者理解のための心理学
杉本徹雄 編著　◎2,600円　ISBN978-4-571-25025-5
マーケティングにかかせない消費者の心理学的理解。意思決定のプロセスや変容、個人差や広告の影響も解明。

人はなぜ誤るのか〔新装版〕
ヒューマン・エラーの光と影
海保博之 著　◎1,800円　ISBN978-4-571-21032-7
注意してもミスをすることがあるが、その「誤り」を積極的に活用していくための発想の転換をすすめる書。

対人援助学の可能性
「助ける科学」の創造と展開
望月 昭・サトウタツヤ・中村 正・武藤 崇 編
◎2,100円　ISBN978-4-571-25038-5
人助けが躊躇される社会に、助け合える仕組みを根付かせるには…障害者、高齢者、犯罪加害者に対する援助理論の展開と実践。

新 医療と看護のための心理学
藤田主一・山﨑晴美 編著　◎2,600円　ISBN978-4-571-20074-8
医療や看護を学ぶ学生、医療現場に携わっている人々のための、医療実践に役立つ心理学基本テキスト改訂版。

教職をめざす人のための教育心理学
藤田主一・楠本恭久 編著　◎2,200円　ISBN978-4-571-20071-7
教職をめざす人のための「教育心理学」に関する基本的テキスト。教育心理学の最新情報が満載の必読書。

人間関係の心理学　体験をとおして学ぶ心理学
蓮見将敏・小山 望 編著　◎2,100円　ISBN978-4-571-20062-5
人間関係の心理を知ることに目標をおいた入門書。各章に「演習」を設定し、「自分を知る」構成となっている。

介護職・リハビリ職（PT・OT・ST）のためのシンプル回想療法　認知症を予防・進行抑制する心療回想法
小林幹児 著　◎2,800円　ISBN978-4-571-50007-7
高齢者ケアにおける回想療法の目的と効果、その技術指導を豊富な事例をもとに解説。パーミング実践DVD付。

回想療法の理論と実際
医療・看護・心理フィールドの心療回想法
小林幹児 著　◎2,800円　ISBN978-4-571-50006-0
医療看護の現場で行われてきた回想療法の理論と実際を「医療看護＋心理フィールド」に焦点を当てて解説。

スポーツ心理学の世界
杉原 隆・船越正康・工藤孝幾・中込四郎 編著
◎2,600円　ISBN978-4-571-25033-0
練習効果を高めたり、試合で実力を発揮するためのポイントと具体策を心理学的見地から解説。

福村出版｜TEL 03-5812-9702　FAX 03-5812-9705
〒113-0034　東京都文京区湯島2丁目14番11号
http://www.fukumura.co.jp

ご注文方法　最寄りの書店へご注文いただくか、電話またはFAXにて、直接弊社へお申し込みください。直送の場合は、代金引き替えクロネコヤマトのブックサービスでお送りします。代金は書籍受取の際、配達担当者にお支払いください。書籍代（税込み）に加え、送料として一律200円かかります。

日本応用心理学会
第77回大会 in 京都

■ 実践のなかで人間を徹底して尊重する心理学をめざして ■

開催日程　2010年9月11日(土)・12日(日)

会　場　京都大学吉田キャンパス〈時計台百周年記念ホール、吉田南総合館〉

〈住　所〉 〒606-8501　京都市左京区吉田二本松町

〈アクセス〉 JR京都駅より市バスで約30分
「京大正門前」「百万遍」下車すぐ

詳細につきましては、大会HPをご覧いただくか、大会事務局までお問い合わせ下さい。

URL　http://www7b.biglobe.ne.jp/~dev-okinawa/jaap/top.htm

電話　075−753−9356

第27回国際応用心理学会大会は、南半球で最初に開催される大会です。開催地メルボルンは、ヤラ川沿いに開けた多文化都市で、治安の良い美しい観光地として知られています。

開催日程　2010年7月11日(日)〜16日(金)

会　場　メルボルン会議・展示センター〈Melbourne Convention and Exhibition Centre〉

オーストラリア・メルボルン市街地にあり、ヤラ川（Yarra River）沿いのメルボルン水族館（Melbourne Aquarium）の対岸（橋を渡って斜め下流側）です。Googleの地図などで簡単に確認できます。

〈交通機関〉 食事や観光を含め、市内での移動には路面電車のトラムが便利です。

日本応用心理学会企画のシンポジウム（Measures to Aging in Japan）

開催日時　7月14日（大会4日目）午前8時30分〜10時

詳細につきましては、大会HPをご覧下さい。　URL　http://www.icap2010.com/

国際応用心理学会
第27回大会 in メルボルン